烈祖成績　四

烈祖成績巻之四

天正四年（一五七六）
至　十年（一五八二）

天正四年丙子、武田勝頼、我軍の二股城に克つを〔聞カ〕、甲斐・信濃・上野の兵を招集し遠州を侵さんと欲す。上杉謙信、兵を沼田に治め西上野を略せんと欲す。勝頼之を聞き南出するを得ず。是に先んじ謙信神祖と好を通ず。

二月七日、謙信書を酒井忠次に遣（遣）はして曰はく「勝頼、信濃・上野の兵を発し二股城を援く。吾之を牽（けん）せんと欲し沼田に出屯す。須らく今月十八日火を西上野に縦つべし。浜松より出兵し其の機を失はずは則ち必ず利有らん」と。神祖、横須賀に築城し大須賀康高をして之に拠らしむ。寛正重助け守り以て高天神城の兵に備ふ。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　是月、織田信長、岐阜より徙（うつ）り江州安土城に居り、信忠をして岐阜に居らしむ。織田本信長記・信長譜

三月、神祖、今川氏眞を駿河に納めんと欲し、書を松平甚太郎家忠に賜ふ。松平康〔親カ〕牧野城に在り。駿州の政令を掌（つかさど）り氏眞を擁護す。家忠日記・松栄紀事

六月六日、酒井雅楽助正親卒（にわか）に疾革（せま）る（危篤になる）。神祖、其第に臨み薬を賜ひ欲する所を問ふ。正親感泣し二子與四郎・與七郎を指して曰はく 與四郎重忠後称河内守。與七郎忠利称備後守 「臣他慮無し。願はくは二子君寵を頼み（ママ）霊して履忠仗義（りちゅうじょうぎ）を成し立て、以て家声を墜さざることを」と。神祖諾し平岩親吉をして医薬を監（み）しめ、数（しばしば）〔 〕臣をして疾を問はしむ。是に至り卒す。家忠日記・松栄紀事・酒井系図

七月、神祖、乾に出兵し樽山寨を攻め之を抜く。安部元眞をして之を戍らしめ諸士伝略 勝阪城に進攻す。天野景貫潮見阪の険に拠り之を拒ぐ。我軍利あらず大原大介・大濱平左衛門等戦死し、大久保忠世・忠佐・水野忠重・石川数正・鳥居元忠・平巖親吉・榊原康政・本多廣孝・松平忠次等苦戦し敵を却く。神祖、大久保忠世をして石嶺に登らしめ之を攻む。忠世大銃を放つ。景貫禦ぐ能はず鹿鼻城に退保

す。地勢窄狭なり。神祖、士卒を損ふを慮り兵を収め浜松に還る。松栄紀事、以潮見阪以下之戦、為七年九月。氏政勝頼対陣黄瀬河時事。今従年譜・創業記・三河物語・家忠日記・徳川記

是月、武田勝頼遠州に出軍し、糧を高天神城に納めんと欲す。神祖、之を聞き横須賀に出屯す。松平康親をして兵を瀧阪塩買阪に伏せしめ〔　〕以て之を邀(ま)つ。勝頼懼れ塩買阪に由る能はず。勝阪より海〔　〕高天神城に至る。唯だ眞田安房守昌幸弾正幸隆第三子、初称武藤喜兵衛。長篠之戦兄信綱・昌輝皆死。復旧姓、嗣信綱家のみ兵一千を将ゐ直ちに塩買阪を過ぐ。世子岡崎より横須賀に馳せ至り、以て敵の至るを待つ。勝頼戦はずして退く。我軍陣を芝原に移す。〔山縣ヵ〕昌景の故部曲（家人）小菅五郎兵衛、小笠原氏儀を助け、出で横須賀に迫る。筧正重歩兵を率ゐ城を出で之を撃破す。甲陽軍鑑・徳川歴代・松栄紀事神祖、勝頼の懸川を襲ふを慮り、大久保忠世・本多廣孝をして之に備へしむ。勝頼、芝原を去ること三里ばかり、我軍の下山を待ち決戦せんと欲す。神祖、戦はんと欲するも内藤正成之を諫止す。神祖、軍を引きて還り、

勝頼高天神城に入る。家忠日記、以横須賀之戦勝頼対陣、係六年十月。今従年譜・三河物語・甲陽軍鑑・徳川記・松栄紀事。但紀事勝頼納糧以下皆為二月事。蓋中間脱月也。年譜・甲陽軍鑑・徳川記無月。今従徳川歴代

是秋、世子参州大浜郷に擢(とう)す（船で行く）。長田平右衛門門（衍字カ）重元の子傳八郎直勝近習と為る。家忠日記○傳八郎後冒永井氏、称右近大夫、為下総古河城主

十月九日、神祖、今川氏眞を浜松城に享(もてな)す。按ずるに創業記・信長譜、三年三月氏眞浜松を出で京師に入る。織田信長に謁し千鳥香炉を上（たてまつ）る。宗祇〔　〕信長、氏眞の善く蹴鞠するを聞き、廷臣を招き氏眞と蹴鞠せしむ。蓋し其〔　〕浜松に還るなり。是に先んじ、勝頼駿州の旧将岡部丹波守・信州の旧将相木市兵衛・上野の将士数十人及孕石主水・大河内傳左衛門等一千余人をして高天神城兵に代りて之を戍らしめ、江馬右馬允・横田甚五郎重量を以て之を監しむ。重量十郎兵衛康重、勝頼滅後仕麾下。更称甚右衛門。領五千石。為使番

十一月十〔　〕神祖、浜松を発し懸川に至る。

十二日、軍を横須賀に移す。

十五日、浜松に還る。松栄紀事

二十一日、平信長、従三位に叙せられ内大臣と為る。公卿補任・家忠日記・信長譜・松栄紀事、諸書皆言織田。今従補任無具姓。信雄叙任亦此例也

二十四日、甲軍田中城に至る。

二十六日、高天神城に入る。

二十七日、我軍見付駅に陣す。是日、甲軍国安を去り、駿州に退き入る。我軍も亦還る。松栄紀事

是歳、武田勝頼遠州金谷峯城に出屯す。神祖小夜中山に陣す。

其夜、勝頼兵を引き去る。家忠日記

五月(年)丁丑四月二十三日、神祖、向阪光行往年数(しばしば)高天神城より浜松に使するの功を賞め、書を賜ひ采邑を給ふ。雑録〔　〕牛之助事記

七月二十日、松平与一郎忠正卒す。子無し。神祖、〔忠ヵ〕正の弟与二郎忠吉を嗣と

為し寡嫂を以て之に妻がしむ。家忠日記・桜井松平系図○忠正妻、神祖異母妹也。忠吉卒又醮保科弾正忠正直

九月十一日、武田勝頼、三浦右馬助をして按ずるに今川氏眞の部将に三浦左馬助有り。信玄に降る。蓋し左訛り右と為すか。未詳樽山寨を攻めしむ。守将安部元眞、其子信勝と悉力拒守す。右馬助〔退ヵ〕。〔神脱〕祖、書を元眞に賜ひ之を褒む。松栄紀事・諸士伝略

秋、神祖遠州に出征す。山梨の穴山梅雪之を拒ぐ。我軍之を撃破す。家忠日記・松栄紀事

十月二十日、武田勝頼、遠州を侵し大井河上に屯す。神祖、馬伏塚に陣し、世子浜松に至る。勝頼小山・高天神等の城を按視し戦はずして退く。

二十一日、世子、勝頼の引き去るを聞き岡崎に還る。

二十三日、神祖浜松に還る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

是月、浜松城を修築するを命ず。

二十四日、大いに将士を享す。家忠日記・松栄紀事　是月、平信長進み従二位に叙せられ右大臣に転ず。信忠従三位に叙せられ右近衛権中将と為る。公卿補任・家忠日記・信長譜・松栄紀事

十一月、植村出羽守家政卒す。家忠日記係十月。今従植村系図

十二月十日、信長参州吉良に猟す。神祖、参州の将士をして之を享せしむ家忠日記作十二月三日。松栄紀事〔　〕日、今従織田本信長記　是〔日カ〕神祖、従四位下に叙せらる。

二十九日、右近衛権少将と為る。年譜・創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事

六年戊寅正月十六日、神祖岡崎城に至る。家忠日記

是月、平信長正二位に叙せらる。公卿補任・家忠日記・信長譜・松栄紀事

二月三日、遠江・参河大雪積むこと四尺余。

十八日、浜松を修葺（しゅうしゅう）す。

二月（ママ）七日、神祖、田中城を攻めんと欲し兵を牽き懸川に陣す。

八日、大井河上に移営す。

九日、田中城を囲む。井伊直政年十八、戦毎に必ず衆に先んず。人其勇敢を称む。前夜鶏鳴（時刻）、酒井與九郎・内藤義教（甚五左衛門義教説見永禄二年）・熊谷小一郎・小栗忠政緑塁壁に潜み以て先登せんと欲す。城兵予（あらかじ）め出て郭外に伏す。比（此）の四士至り伏発し邀撃す。四士健闘し之を却く。神祖、之を聞き怒り其の軍令を犯すを責め之を黜（ちゅつ）す（罰す）。（家忠日記・松栄紀事一書並云、九年高天神城陥之、後赦四士之罪）松平甚太郎家忠・榊原康政・本多忠勝・松平主殿助家忠等先を争ひ城を攻む。主殿助家忠進み濠に至り〔　〕其浅深を測り還り報して曰はく「水浅く防兵無し。之を急攻すべし」と。先に〔　〕柵を抜き外郭を攻め破り将に子城に入らんとす。守将一條信龍の兵〔　〕門橋上に陣し以て之を待つ。久世廣宣・中根善二郎・向阪宗十郎槍を揮ひ接戦す。松平主殿助家忠の兵佐野次助・行家彦十郎健闘し級を獲る。

戸田忠次の兵黒田二郎右衛門・安形半兵衛・岸上勘三郎・福井源蔵等力戦す。城

兵志を決し必死に拒ぐも〔　〕勝へずして退く。

九日、神祖、牧野城に入る。

十三日、小山に観兵す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

是日、上杉謙信卒す。年四十九。謙信子無く、北條氏康の子三郎景虎を養ひ、子と為す。景虎氏康第七子　又甥喜平次景勝を養ひ、子と為す。景勝謙信妹夫長尾越前守政景子。養於謙信冒（後を継ぐ）上杉氏領越後・佐渡、至従三位権中納言。後従封奥州会津、世称会津中納言　故に二子国を争ひ日に干戈を尋ぬ。（次々と戦争をおこす）年譜・創業記・家忠日記・甲陽軍鑑

十八日、神祖、浜松に還る。年譜・家忠日記・松栄紀事

四月十七日、世子浜松に来神祖に謁す。

翌日岡崎に還る。年譜・家忠日記

八月七日、松平甚太郎家忠、西郷家員に代り牧野城を助け守る。家忠日記

八日、横須賀の守将大須賀康高甲軍と高天神城下国安河に戦ひ之を敗り多く〔級カ〕

獲る。阪部廣勝戦功有り。家忠日記・松栄紀事

二十一日、神祖、世子と〔出カ〕兵し小山に至る。

二十二日、大井河を渉り前軍の歩卒をして田中の禾稼（田畑の作物）を暴かしむ。城岳（兵）出で之を拒ぐ。平巖親吉の兵接戦し後軍踵至す。敵兵退き城に入る。我軍進み遠目・持舟に至る。三河物語遠目作當部。諸書持舟或作用宗・望宗。皆語音転訛也 石川数正殿を為し持舟の城兵出て之を尾ふ。数正還り戦ふ〔　〕。家忠日記・松栄紀事 松平康定・酒井忠〔次カ〕・大久保忠直・大田吉政・安藤治右衛門定次大郎左衛門家重第四子。木工助基能弟。松栄紀事作正次。按ずるに正次、定次の子。此の時尚ほ幼く以て其龍（襲）称治右衛門は誤り。正治と為し今之を訂す ・石川八左衛門等獲を斬るの功有り。我軍還り田中城下を過ぐ。神祖謀りて曰はく「吾直ちに兵を引きて還らば則ち彼必ず之を躡はん。吾佯り城を攻むると為さば則ち彼守禦に暇あらず、安んぞ能く戦に出でんや」と。乃ち城に迫りて過ぐ。敵果たして守備を厳しくし敢へて出でず。

九月四日、神祖、牧野城に入る。家忠日記・松栄紀事

六日、浜松城に還る。参州の諸将牧野城に在り、城壁を修築す。家忠日記

十月十九日、武田勝頼駿州に出屯す。

二十七日、世子、之を聞き浜松に来。晦（みそか）、勝頼大井河を渡り遠州に入る。夜半高天神城の兵一人〔　〕を犯し去らんと欲す。渥美勝吉之を撃ち殺す。頸に勝頼の密書を繫ぐ。勝吉之を得神祖に献ず。家忠日記

十一月二日、勝頼、営を小山相良に移す。神祖、世子と兵八千余騎を将ゐ馬伏塚に屯す。

三日、陣を総社山に移す。諸卒山下に陣す。勝頼、横須賀城を攻めんと欲し神祖を憚り其の道路を敢へて進まざらしむ。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　敵将小笠原氏儀・小管五郎兵衛海路を取り城下に至る。筧正重城を出て〔　〕之。勝頼、軍を分け十七隊と為す。神祖と江を隔てて陣す。泥濘にして渉るべからず、相対すること数

日。世子、夜潜かに江を渡りて勝頼の営を覘(うかが)ふ。帰りて神祖に「之を撃たんと欲す」と白す。神祖聴かず。拠険の敵を以て軽挙すべからずと教ふ。勝頼、戦はんと欲するも其の臣固く諫む。故に戦はずして高天神城に退き入る。渥美勝吉・柘植又十郎等尾撃し首級を獲る。神祖、勝吉の功を褒め革胴服を賜ふ。

二十五日、勝頼兵を引き甲州に還る。晦、神祖浜松に還り、世子岡崎に還る。家忠日記・松栄紀事

七年己卯正月二十日、神祖、吉良に猟す。

二十七日、浜松に還る。

三月二十五日、武田勝頼遠州を侵し国安に屯す。神祖、之を聞き世子と馬伏塚に馳せ至る。参州の諸将軍見〔　〕。

二十七日、進み袋井駅に至る。是日、勝頼国安を去る。

二十九日、大井河を渡りて退く。神祖浜松に還る。年譜・創業記・家忠日記。按ずるに松栄紀

事二月三月此の事を連書す。以て勝頼復び出づると為すは重復（複）し誤り。今上三書に従ふ

四月七日、神祖の第三子長麻呂 征夷大将軍太政大臣台徳公 浜松城に生まる。土井甚三郎利勝を以て近侍と為す。利勝長じて大炊頭と称し補佐を為す。 年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○拠諸士伝略及雑録、利勝〔 〕野信元子也。信元遭害年僅二歳。其母抱之遁去、得免。再嫁土井小左衛門利勝。従其母在小左衛門家、因冒土井氏 初め世子、織田信長の女を娶る。二女を生む。所生闕（関カ）口氏は悍（かん）（気が荒い）にして妬（と）、神祖と琴瑟諧せず（うまくいかない）。離居し岡崎に在り。築山殿と称す。 松栄紀事曰、神祖出之、流寓伊勢・越前。世子迎之居岡崎。然築山之称世所共知。今従徳川歴代 性行淑（よ）からず。世子をして夫人と離間せしめ武田勝頼を誘ひ岡崎を奪はしめんと欲す。遂に夫妻反目するに至る。 松栄紀事曰、欲使殺信長而立世子。按ずるに、信長輒ち殺すべからず。縦（かり）に之を殺す、世子豈に其家を継ぐを得んや。恐らくは此の理無し。今徳川歴代に従ふ 世子、雄勇にして暴なり。蹋歌（とうか）（舞踏）を好み国を挙げ風を成す。少しく意の如からざれば輒ち手づから之を刃す。民命（めい）に堪へず。 創業記・徳川歴代 往年伊良崎に退軍し世子殿（しんがり）を

為す。勝頼出躡する能はず。世〔子〕其の勇を自矜し事毎に不法多し。神祖、之を患ふ。創業記 是に至り夫人、世子罪十二ありと〔　〕。信長に讒す。酒井忠次を以て使と為し岐阜に往かせ之を訴ふ。信長、忠次を召し親(みずか)ら之を詰問す。忠次之を証成す。十罪皆実なりと。信長其の二を問ふに及ばず。忠次をして神祖に謂はしめて曰はく「信康凶悖にして邦を保つの器に非ず。殺さずんば必ず後禍有らん」と。忠次命(めい)を奉(う)けて帰る。岡崎を過ぐるに及び世子に謁せず。〔　〕浜松に赴く。世子、其の免れざるを知り恐懼し命を待つ。〔忠次〕神祖に告ぐに信長の言を以てす。神祖、憮然として曰はく「事既に此の如し。宜(むべ)なり。信長の之を殺さんと欲するなり」と。

八月三日、神祖、岡崎城に至り世子を大浜に放つ。

四日、世子岡崎に至り無罪を披陣(陳)す。神祖聴かず。其の夜世子大浜に還る。時に平巖親吉世子の傅(ふ)として神祖に白して曰はく「遽(にわか)に世子を殺さば後必ず之を悔い

ん。臣傅として状無し（失態だ）。請ふ、臣の首を斬り信長に送り謂はしめよ、世子、実に罪無しと。皆親吉の為す所なれば則ち信長霽威（せいい）せん（怒りが解ける）」と。而して世子の穫免を冀（こいねが）ふなり。言甚だ切至なり。神祖、其の忠誠を嘉して曰はく「汝を殺して事済むべくは則ち可なり。然らずして、良臣を併せ喪ふは我志に非ざるなり」と。

五日、神祖、西尾城に如（ゆ）く。

七日、又岡崎に至る。

九日、世子を遠州堀江城に遷し、又、〔　〕城に遷し出づるを許さず。

十二日、神祖、浜松に還る。

二十九日、野中重政をして関口氏を小藪邑に殺さしむ。年譜・創業記・三河物語・家忠日記・徳川歴代・松栄紀事○松栄紀事曰、使村越茂助殺之。家忠日記曰、岡本平右衛門。雑録築山殿事記曰、岡本八郎右衛門。蓋、茂助直吉奉命誘出築山殿、重政率平右衛門等殺之於中路也。野中氏家譜事証的確。今拠之 是に先んじ

上杉景虎、上杉景勝と争戦輟(や)まず。景虎救を北條氏政に求む。武田勝頼の妻、氏政の妹にして景虎の〔　〕なり。故に氏政、勝頼をして之を援けしむ。勝頼兵二万を率ゐ赴く。赴く後景勝大懼して勝頼を東上野地及び黄金一万両を以て賂(まいな)ひ麾下に属さんことを請ふ。嬖臣(へいしん)（君主気に入りの家来）長阪釣間・跡部勝資を各金二千両に賂ふ。勝頼賂を受けて還る。景勝遂に景虎を滅ぼし越後を取る。是に由り北條氏甚(ママ)、勝頼を怨み之と純(絶)つ。甲州の士庶皆勝頼の不義を譏(そし)りて釣間・勝資の貪婪を悪(にく)まざる莫(な)きなり。甲陽軍鑑・松栄紀事

九月五日、氏政、朝比奈泰勝を以て使と為し和を神祖に乞ひて曰はく「卿、能く講和せば吾当(まさ)に好を信長に通じ東西夾撃し以て勝頼を滅すべし」と。神祖、之を然りとし使を遣はし信長に告ぐ。信長諾して曰はく「卿、先に氏政と平げよ（仲良くせよ）。然る後に勝頼を図らん」と。

十三日、三家の盟成り約して曰はく「勝頼〔　〕州に出づれば則ち家□卿駿州に入

り、勝頼遠州に出づれば則ち氏政甲信二州間に屯し、以て之を牽せん（けん）」と。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　神祖、既に関口氏を殺す。信長の怒猶ほ夫人を解（ゆる）さず。忿怨旧の如し。

十五日、神祖、已むを得ず大久保忠世・天方山城守道興・服部正總を二股城に遣はし自尽を世子に賜ふ。時に年二十一。年譜・創業記・三河物語・家忠日記・徳川歴代・松栄紀事　初め神祖、屡（しばしば）世子を遷徙（せんし）す。蓋し微意有るに〔而〕諸将悟らず。時の人皆元老重臣を咎む。徳川歴代○本書曰、酒井忠次・大久保忠世二人将夫人命使于岐阜。諸書忠次一人而無忠世名。故不取。又曰、毎遷徙世子使忠世監護。遂命忠世殺之。忠世誘出世子観漁殺之舟中。以自殺聞。時人悪其不忠。此又諸書所不載。其言出於変憎不足信。今従上諸書

十七日、横須賀の守将大須賀康高、兵を高天神城下三峰山に伏せ城兵を誘ひ出し之を撃たんと欲す。城兵果たして出で伏発し之を撃破す。家忠日記・徳川歴代　康高の部兵久世廣宣、敵を射ち多く之を斃す。一矢敵兵を洞貫（＝貫通）し松樹に中（あ）

たりて止まる。後に城兵其の矢を送る。諸士伝略 阪部廣勝、城兵中根郷左衛門其の余を斬り、康高の兵多く首級を獲る。敵敗走し城に入る。松栄紀事以此戦係四年二月、錯簡。今従家忠日記・徳川歴代 武田勝頼兵〔 〕六千を率ゐ駿州に出で沼津城を築く。高阪虎綱の子源五郎をして之を守らしむ。松栄紀事。按ずるに、源五郎、三年五月長篠に戦死す。甲陽軍鑑に拠れば其の弟を以て源五郎を襲称し部兵を統領するなり 北條氏政、勝頼の出兵を聞き三万余騎を将ゐ豆州三島に軍す。勝頼黄瀬川に軍す。

是の日、神祖、浜松を発し懸川に至る。

十八日、駿州に入る。酒井忠次諫めて曰はく「深く敵地に入るは後険隘(あい)にして前に勍(けい)（強い）敵あり。良策に非ざるなり。兵を瀬戸 駿州西郡地名 に按じ（おさえ）、以て東軍の変を待つに如かず」と。神祖曰はく「吾氏政と約有り。変に中(の)るべからず。且(しばら)く鷸蚌(いつぼう)の勢（鷸しぎ蚌どぶ貝の争い＝漁夫の利）須らく其の弊に乗るべし」と。遂に軍を進め田中城を左して海に沿ひ東し二山に陣す。忠次軍を瀬戸に駐す。

十九日、松平甚太郎家忠・牧野康成をして持舟城を攻めしめ之を抜く。火を縦ち城を焚く。松平康親進み由井倉沢に至る。松栄紀事　勝頼我軍の由井に至るを聞き決戦せんと欲し使を遣はし氏政に謂ひて田(日)はく「戦はんと欲すれば即ち戦ふ。吾当に黄瀬川を渡り以て雌雄を決すべし。吾浜松の兵出で由井倉沢に在るを聞く。今軍を還し彼と決戦せんと欲す。卿、後を躡(お)はんと欲するは固より吾の欲する所なり」と。氏政、約を渝(か)へ対へて曰はく「吾部属を按行する為に出兵す。戦を求むる者に非ず。卿宜しく浜松の兵と戦ふべし。吾与(あずか)らず」と。松栄紀事曰、氏政不報。今従甲陽軍鑑・年譜附尾　勝頼、左馬助信〔豊カ〕・向阪源五郎を沼津城に留め、以て氏政に備ふ。急ぎ兵を引き河成に陣す。時に富士川暴漲(ぼうちょう)して渡るを得ず。神祖、勝頼の至るを聞き、之を逆撃せんと欲す。松栄紀事載一説曰、鳥孫左衛門甥為僧居駿府。聞勝頼至奔赴告之　石川数正・大須賀康高諫めて曰はく「田中城は我後に在り。軽に敵地に戦ふは危道なり」と。神祖之を然りとし、還り藤枝に至り稲を暴きて去る。酒井忠次瀬戸を出で殿

を為す。創業記考異・甲陽軍鑑係八年。今従年譜・創業記正文・織田本信長記・家忠日記○松栄紀事、神祖発浜松以下在四年。錯簡也。今従上四書、釐（り）正之

是夕、勝頼駿府に至り我軍の既に去るを聞き慎恚（しんい＝激しく怒る）して曰はく「長篠の役、戦ふべからずして戦ひ竟に敗を取る。是役（えき）や、以て戦ふべくして戦ふを得ず、此れ命の窮みなり。奈何（いかん）すべき」と。甲陽軍鑑・年譜附尾・松栄紀事　既にして既（衍字）氏政兵を引き小田原に還る。

二十五日、勝頼州に還る。神祖退き伊良崎に至る。晦（みそか）牧野城に入る。

十月朔（ついたち）、凱旋す。

九日、今川氏眞を浜松城に享（もてな）す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

十一月四日、松平主殿助家忠、伏を伊良崎に設け甲軍の至るを待ち燧を挙ぐ。応ぜんが為に鳥居元忠の歩卒濫りに火を近地に縦ち期に愆（たが）ふ。神祖怒り之を究（もと）め歩卒を捕へ之を斬る。七日、家忠又兵を瀧阪に伏せ甲軍を急撃し首級を獲り輜重（しちょう）を

奪ふ。神祖、之を褒む。家忠日記

十一日、神祖浜松を発し懸川に至る。

十二日、馬伏塚に軍す。

十四日、浜松に還る。家忠日記曰、十三日陣横須賀、十五日還浜松。今従年譜・創業記

二十四日、甲軍田中を出で国安に屯す。

二十七日、家忠見付の駅に陣し之に備ふ。

是日、甲軍国安を去り駿州に入る。家忠兵を引き還る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

八年庚辰正月五日、神祖、従四位上に叙せらる。年譜・創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事

○家忠日記曰、正月三日、武田勝頼率甲斐・信濃之兵、援高天神城。織田信忠長カ将兵発清洲。按ずるに、此の時神祖、未だ嘗て援を信長に乞はず。信忠出兵に応ぜず。且は諸書載せざる所なり。故に取らず

二十四日、鷹を参州西尾に於(放)つ。

二十七日、岡崎に至り尋ね浜松に還る。家忠日記・松栄紀事

三月十六日、浜松を発ち高天神に向ふ。是日、高天神城の兵天王馬場に出屯し、大須賀康高出て之を撃つ。康高の部兵久世廣宣・阪部廣勝・氏家金二郎・近藤武助・菅沼兵蔵・鷲山傳八郎槍を揮ひ健闘す。本多忠勝の兵内山忠三郎・日置小左衛門等争進力戦し城柵を攻め破る。

十八日、大阪山砦を築く。 按ずるに、下文に大塚横須賀の戍兵有り。大坂疑ふらくは大塚の訛りなり。今家忠日記・松栄紀事に従ひ輒ちは改めず

二十五日、中村砦を築く。

二十九日、砦を田中に築き高天神城に迫る。 年譜、田中下註駿州。松栄紀事、注遠州地名。按ずるに、此時駿州田中城、勝頼に属し応ぜず。砦を築くは蓋し別の一地名か。疑ふらくは紀事実を得るを為すやと

閏月（閏三月）九日、神祖、浜松に還る。 年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事 是に先んじ、神祖、持舟城を抜くと雖へども其地敵に便にして我に不便なり。故に其（その）焚焼より戍兵を置かず。是に至り武田勝頼、塁壁を田中・江尻二城とともに修築し声援相接

す。朝比奈駿河をして之を守らしむ。松栄紀事

五月朔、神祖出軍し〔　〕屯す。

三日、田中城を攻む。

四日、遠目に至り八幡山に陣す。

五日、歩卒をして花沢の禾苗（あわ・いねの苗）を暴き田中の麦を取らしむ。兵を収め浜松に還る。石川数正殿（しんがり）を為す。持舟城の兵遠目阪に下り出で之を躡（お）ふ。数正騎を回し接戦す。酒井重忠・松平康親・牧野康成・平巖親吉・内藤家長等馳せ還り競進す。松平眞乗横から敵兵を撃ち之を破る。敵潰走す。尾崎半平定正、向井伊賀を斬る。須田文平、城兵櫻井兵庫を斬る。天野小麦右衛門重次按ずるに、天野参右衛門、三方原に戦死す。蓋し其子なり朝比奈市兵衛を斬る。松平康親の兵岡田竹右衛門元次、城将三浦兵部を斬る。斬兵部、伊賀年譜・松栄紀事、為七年九月。抜持舟城時事。徳川記、以決戦係九年五月。今従家忠日記。尾崎半平名拠高梨系図城中の精兵八千余人戦死す。松栄紀事正文作三十二人。今従家忠

日記及紀事一説　守将朝比奈駿河、門を闔ぢ堅守す。我軍復(ふたた)びは之を攻めず。兵を引き牧野城に入る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　是に先んじ、一色左京家忠日記・松栄紀事書一色某。無左京之称。今拠年譜　譴せられ康親の家に匿(かく)れ適(たまたま)陣中に在り。岡田元次、三浦兵部の首を左京に授け級を上(たてまつ)らせ以て罪を贖はしむ。神祖、其実を廉知し（きちんと知る）元次の功を譲るを嘉(ほ)め鎧裒(がいほう)（鎧っつみ）を賜ひ以て之を賞す。

六月十日、神祖横須賀に営し諸軍鎌田に屯す。

十一日、高天神城を按視し（偵察）砦を鹿鼻に築き之に備ふ。

十七日、火を高天神の外郭に縦ち歩卒をして城外の稲を穫らしめ浜松に還る。

七月二十日、神祖、又兵を将ゐ懸川に至る。家忠日記・松栄紀事　大井川を渡り田中八幡山に営す。諸将をして丁壮（作業員）を護らしめ田中の稲を穫る。岡田元次、神祖に白して曰はく「河水雨毎に一夜にして暴漲す。武田勝頼人の不意に乗ずるを好む。収穫粗(ほぼおわ)畢る。須らく速やかに河を渡るべし。濡滞すべからず」と。神祖之を然り

とし、即ち河を渡りて還る。

其夜、果たして雨ふり河水大いに溢る。勝頼適(たまたま)駿州に在り。管内の諸城を按行し我軍の出づるを聞き、急ぎ田中に馳せ至る。水に阻まれ渡るを得ずして止む。神祖、元次の善く兵機を察するを褒む。松栄紀事

二十七日、神祖、兵を戢(おさ)め浜松に還る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

八月、北條氏政出で黄瀬川に屯す。武田勝頼と相持(じ)す（対峙する）。

十六日、氏政、小笠原某を以て使と為し浜松に来、神祖に告ぐ。按ずるに、氏政・勝頼、黄瀬川に対陣するは去年九月に在り。然るに年譜・家忠日記・松栄紀事皆曰はく、此年又対陣すと。今並存し以て疑を伝ふ。甲陽軍鑑亦是年に係く。説上に見ゆ

二十七日、松平二郎右衛門重吉、参州野見邑に卒す。年八十三。

九月二十三日、参州刈屋城を水野忠重に、遠州馬伏塚城及び鎌田郷を高力清長に賜ふ。家忠日記・松栄紀事 是月、神祖の第四子福松麻呂、浜松城に生まる。源流綜貫。福松

麻呂薩摩守忠吉也。事在下文

十月十二日、神祖、浜松を発し高天神に赴く。

十九日、参州の諸将子（于カ）大阪横須賀に陣す。

二十二日、諸軍進み高天神城に迫り砦を横須賀・橘谷に築く。横須賀、創業記・松栄紀事、無横字。今拠年譜 諸軍をして鹿鼻・中村・小笠砦とともに之を厳守せしむ。四繞城を囲み隍（ほり）を鑿（うが）ち柵を樹え一歩に一兵を置き之を戍る。城兵をして闘に出づるを得ざらしむ。家忠日記・松栄紀事 神祖、成瀬正一を召して曰はく「今汝を此に留む。須らく城外を巡るべし。一昼夜毎に一たび戍兵を次（つ）げ。懈（おこた）る者有らば之を罰せよ」と。正一、副一人を請ふ。神祖曰はく「汝其人を択べ」と。対へて曰はく「日下部兵右衛門可なり」と。神祖即ち二人に命じ、明年春に至るまで一百二十余日、正一・定好昼夜巡行し敢へて一日も懈弛せず。成瀬系図

二十八日、神祖馬伏塚に移営す。

十一月十二日、松平主殿助家忠を安土に遣はし高天神城に迫るを織田信長に告げしむ。

十二月二十日、信長、猪子兵助・福富平左衛門・長谷川藤五郎秀一（幼名竹麻呂、後仕秀吉公領越前、称東郷侍従）・西尾吉次を以て使と為し神祖を来労（ねぎら）はしむ。

二十一日、四使、神祖に従ひ巡行合囲（ぐるりと取り囲む）す。

二十二日、神祖、浜松に還り四使を享（もてな）す。（年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事）

九年辛巳三月、高天神城潰（つい）ゆ。是に先んじ、我兵四面合囲すること釜魚籠鳥の如し。脱去すべからず。城兵連署し向阪甚太夫をして急を武田勝頼に告げしめて曰はく「浜松の兵勢日に盛んにして城を囲むこと数重なり。戦はんと欲するも戦ひ得ず。糧尽き力竭（つ）く。命旦夕に在り。願はくは急ぎ之を救へ」と。独り横田重量のみ以て不可と為す。別に書を以て勝頼に白して曰はく「此城救居すべからず候。能く出兵し敵を攘ひ城を保ち得しめば則ち之を救ふこと可なり。今家□卿横須賀

に在り、諸将をして六砦を厳守せしむ。比(此)れ勍敵なり。戦ふと雖へども勝つべからず。若し君侯来援せば彼之を中路に邀(ま)つ。援を信長に乞ひ前後挟撃すれば則ち危道なり。彼又信長の兵を分け駅路に由(よ)り直ちに駿府に至れば我帰路を扼(おさ)ふ。松栄紀事注曰、東海道駅程自遠州金谷渡大井河歴嶋田・藤枝、至駿府為本道。高天神在其南　北條氏政駿州に出でなば則ち前に浜松の兵と相持(じ)し、後に信長・氏政の邀(むかえ)る所と為る。進退拠を失ひ敗を取るは必なり。此臣所謂(いわゆる)救ふべからざる者なり。命を受け城を守る、死固(もと)より其分なり。唯だ君侯の為に万全を図るのみ。若し必ず之を救はんと欲せば則ち臣に陰符を賜へ。期を刻み甲州を出師し旌旗塩買阪に見えなば則ち城兵図を突きて出でん。庶幾(こいねが)はくは僥倖万に一ならんことを。然りと雖へども出師し城を救ふとも、城敵の有と為る。徒(いたずら)に其衆を抜きて帰ること武と謂ふべからず。城兵囲を潰え必ずや免れ得ず。此れ其の救ふべからざる事勢甚だ明かなり。願はくは之を熟計せよ」と。勝頼、之を善しとし諸将を召し会議す。長坂釣間・跡部勝資曰は

く「此れ救ふべからず。甚五郎の言是(ぜ)なり」と。勝頼以為へらく、坐して甲府に在り終に之を救はずは、人みな我を以て怯と為すと。乃ち東上野に出兵し仙城を抜きて還る。仙城、甲陽軍鑑作膳城、今従松栄紀事　城兵援軍の至らざるを知り囲を潰し脱去するを議る。疲頓し遽(にわかに)出づるを得ず。我軍之を覚り要害を厳守す。大久保忠世守る所の林谷険隘殊に甚だし。前に六笠・懸川・牧野城寨有り、南に大塚・横須賀の戍兵有り。忠世、之を恃み纔かに兵六騎を以て之を戍(たも)つ。城兵其の寡きを詗(うかが)ひ知る。

二十二日夜二更、二隊に分け為し、岡部丹波・横田重量林谷より出づ。忠世其の弟平助忠教をして之に赴かしむ。忠教、諸書作忠孝。今従諸士伝略。平助後更彦左衛門　戍兵六騎と合せて十九騎。忠教撃たれ傷つく。丹波、本多主水をして其の首を取らしむ。忠世敵の出づるを聞き馳せ来るも敵已に遁れ去る。石川康通、足助鳥原の要路を扼(おさ)ふ。前に龍谷山有り、渓を廻り転ずれども戍兵の多寡見るを得べからず。城兵三

百余突出せんと欲す。我軍厳しく備へ之を撃つ。敵敗走し龍谷に陥つ。残兵数百囲を衝き免れ去らんと欲す。本多忠勝・鳥居元忠之を撃破す。鐘郭に迫る。水野忠重・其子藤十郎勝成進み城中に入る。家忠日記・松栄紀事、勝成小名国松。称藤十郎又更六佐衛門、後叙従五位下任日向守 大須賀康高先を争ひて進む。久世廣宣、城兵依田木工左衛門を斬る。諸士伝略 忠重の兵清水次右衛門・山本市作先登し戦死す。的場郭の敵兵決死健闘す。我兵猶予す（ためらう）。松平孫六郎康長戸田弾正子虎千代、賜氏、在永禄十年 時に年十六。的場郭を攻めんと請ふ。神祖之を許す。康長急ぎ進み之を攻む。火を城中に縦つ。戸田忠次・松平主殿助家忠相継ぎて進む。忠次の兵石原孫二郎・大屋喜助・植田十兵衛・芳賀清助、家忠の兵板倉木工右衛門等力戦し之を破る。板倉喜蔵戦死す。大久保忠世横から撃ち又之を破る。城兵殆ど殲ぶ。城遂に陥つ。三倉忠右衛門定次、孕石主水を擒（とら）ふ。神祖、之を戮す。大河内某を赦し厚賜之を遣はす。初め神祖、質として駿河に在り。主水 数（しばしば） 神祖に無礼なり。大河内某碩心（せきしん）（ねん

ごろ）に保護す。故に之に及ぶを得。神祖、予め内藤信成・菅沼忠久に命じて曰はく「高天神城陥ちなば則ち残兵必ず国安に走る。汝等宜しく之に備ふべし」と。残兵果たして国安に出づ。信成・忠久邀（むか）へ撃ち之を殲す。凡そ城兵の首を斬ること七百三十級。録し安土に送る。年譜・創業記・三河物語・織田本信長記・甲陽軍鑑・家忠日記・松栄紀事○家忠日記曰、信長援助部将佐佐成政・野野村三十郎、録数還安土。拠之則信長遣救軍也。然諸書所不載、不知其在何時。故不書

城兵横田重量直ちに柵を斫（き）り甲州に出奔す。武田勝頼、重量の忠勇を賞め佩刀を賜ふ。重量拝するも受けずして曰はく「臣囲を潰して出づ。何ぞ之を賞さん」と。時の人之を称する有り家忠日記・甲陽軍鑑・松栄紀事

二十四日、神祖、浜松に凱旋す。諸将を召し軍功を褒奨し休暇を賜ふ。各其城に帰る。

六月二十八日、神祖、浜松を発し見付駅に軍す。年譜・創業記・家忠日記。按ずるに、三書其の故を載せず。亦浜松に還るの日無し

是月、東條城主松平甚太郎家忠卒す。桜井松平系図

七月三日、松平主殿助家忠をして砦を相良に築かしむ。武田勝頼、城を甲州韮崎に築き新府と号す。　家忠日記・甲陽軍鑑

十二月十五日、神祖、鷹を馬伏塚に放つ。　年譜・創業記・家忠日記

十八日、織田信長、甲駿二州を略せんが為に西尾吉次をして糧を東條に収めしむ。

是月、奥平九八郎美作守信昌子。時十五歳。長而叙従五位下、任大膳大夫　首服を神祖の前に加へらる。諱字を授けられ家昌と曰ふ。守家刀を賜ふ。

是歳、神祖、母妹を以て松平家清に嫁がしむ　家忠日記。母妹初適荒川頼持。在永禄四年　公子福松麻呂を以て松平家忠の封を紹（うけつ）ぎ東條城に出居せしむ。長じて忠吉と名のる　源流綜貫　大久保浄玄卒す。年八十三　家忠日記　木曽左馬頭義昌、義仲の裔にして信州の豪族なり。往年武田信玄、隣境を侵掠するに、義昌其彊を畏れ麾下に属す。信玄悦び女を以て之に妻（とつ）がしむ。勝頼彊暴にして兵を好み徭役（徴発）頻りに興（お）き、義昌其命に堪えず。濃州人苗木久兵衛に就き　按ずるに、苗木城主遠山久兵衛友政、斎藤龍興に党するを

以て信長公の逐ふ所と為る。諸書城を以て氏と為す。往々其例有り。疑ふらくは即ち其人か織田信忠に通款す。信忠、平野勘右衛門をして安土に馳せ至らしめ之を信長に告げて曰はく「木曽は険悪の地なり。彼若し我を欺き険隘に誘ひ陥さば則ち噬臍（ぜいせい）（ほぞをかむ）して及ぶ無し。其の任子を送らせ立誓せしめ、然る後に兵を進めよ」と。既にして久兵衛、義昌及び将士の質を送り之を岐阜に致す（行かせる）。信長之を許す。家忠日記・松栄紀事

十年壬午正月六日、木曽義昌、武田勝頼に叛く。義昌の臣千村左京松栄紀事作千原某。今従信長譜其謀を以て阿部加賀に告ぐ。勝頼大いに駭き将に兵を発し之を撃たんとす。加賀、謀りて曰はく「木曽険隘にして、猝（そつ）攻すべからず。義昌の夫人は君侯の妹なり。臣請ふ、夫人に就き其の計に及ぶを緩にせんことを。間を伺ひ潜かに精兵五騎十騎を遣はし其不意を襲はば則ち必ず利有らん」と。勝頼、従ふ能はず。二月二日、左馬助信豊をして兵五千騎を将ゐ之を攻めしむ。義昌使を遣はし陳謝す。勝頼聴かず。義昌、千村豊前・馬場半左衛門・萩原十左衛門・上村作左衛門

をして兵を率ゐ鳥居嶺に拠らしめ、以て敵の至るを待つ。勝頼の前隊諏訪采女及び弟源二郎、兵を督ませ進み闘ふ。義昌険に拠り之を拒ぎ、采女兄弟を斬る。甲軍多く敗死す。信豊、衆を激まし競進す。義昌懼れて引き去る。信豊の追撃甚だ急なり。義昌の兵火を縦ち藪原を焼き南宮城に退き入り険に拠り之を拒ぐ。信豊、兵を引き還る。信長、神祖と東西に夾撃し以て甲信を取るを約す。信忠をして兵五万を将ゐ木曽口に向かはしめ、自ら兵七万を将ゐ伊奈口より入る。金森長近、兵三千を領し飛騨口に向かふ。神祖、兵三万五千を将ゐ駿州より入る。北條氏政兵三万を率ゐ関東口に備ふ。勝頼、甲斐・信濃・上野三州の兵二万余騎を率ゐ諏訪に陣す。兵を分け諸城を戍る。弟仁科五郎信盛甲陽軍鑑作仁科薩摩守晴清、今従家忠日記・甲乱記・武田家譜・松栄紀事をして高遠城を守らしむ。日向宗英大島城を守り勝頼将日向大和、剃髪称宗英保科越前守正直筑前守正俊子、初称甚四郎後更弾正忠飯田城を守り、馬場民部・多田治部右衛門・横田重量深志城を守る。

十二日、信忠岐阜を発し木曽口より入る。滝川一益・河尻肥後守秀隆を以て前鋒を為さしむ。肥後守、即與兵衛也。諸書或作肥前守。説見三年　勝頼之を聞き小山田昌行・渡邉金太夫・小菅五郎兵衛をして高遠城を援けしむ。逍遥軒信綱・安中七郎三郎・小原丹後・依田能登、大島城を援く。小幡因幡・波多野源左衛門、飯田城を援く。又神祖の駿州に入るを聞き室賀兵部をして鞠子に拠らしめ之を拒ぐ。屋代某・関甚五兵衛、持舟城に入り朝比奈駿河を援く。依田信蕃・三枝土佐、田中城に拠る。伊奈口は東仙道第一の険要にして輒ちは入るを得ず。下條伊豆信氏をして之を守らしむ。其の族九兵衛叛き河尻秀隆の兵を引き城中に入れしむ。信氏遁れ去る。松尾の守将小笠原信嶺降を乞ひ郷導を為す。信忠の兵伊奈口より入り、践むに人無きの地の如し。木曽義昌来謁し甲軍の首級を上る。信忠書を授け之を褒む。織田源五長益　信秀第五子。信長公弟、叙従五位下、剃髪号有楽斎　・津田孫十郎信次をして義昌の援軍と為し、桔梗原に陣せしむ。信忠、飯田に至り信綱等大島城を棄て遁げ去る。

信忠、陣を大島に移し毛利河内守・河尻秀隆をして大島城を守らしむ。進み飯島に至る。森勝蔵長可（三左衛門可成第二子、為武蔵守。彰考館史臣丸山可澄曰、長可諸書皆誤作長一。三左衛門家世皆以可字連名。至勝蔵信長公賜諱字。故以長字連上）団平八前駆を為す。信州の城塞或は降り或は遁る。望風（遠くで強いのを知る）崩潰す。勝頼猶ほ諏訪に在り戦守の策を議る。城織部曰はく「兵五千を分け我に授けよ。我横田甚五郎と前駆を為さん。又五千を以て小山田八左衛門・初鹿傳右衛門に授け後継と為せ。小山田右衛門・眞田安房・小幡下総をして麾下の騎兵一万を指揮せしめ一挙に雌雄を決せば則ち勝たざる蔑（な）し」と。長坂釣間之を拒みて曰はく「彼尚ほ乳臭く其言用ゐるべからず」と。阿部加賀曰はく「我諜者を遣はし敵を覘ふに、信忠の陣営相統摂せず。瀧川・河尻深く入り地の利を請けず。夜に乗じ襲撃せば必ずや大捷を得ん」と。釣間又之を拒む。議竟（つい）に決せず。因循旬に渉る（ぐずぐず十日もかかる）。（年譜・創業記・家忠日記・織田本信長記・信長譜・甲陽軍鑑・甲乱記・松栄紀事）

十六日、勝頼の兵小山城を棄て甲州に走げ帰る（に）　年譜・創業記・家忠日記

十八日、神祖、浜松を発し駿州に向かふ。

十九日、牧野城に入る。

二十日、田中に至る。

二十一日、我軍遠目阪を経、持舟城に迫る。神祖、駿府に至る。

二十三日、諸将をして持舟城を攻めしむ。

二十七日、持舟の守将朝比奈駿河和を乞ひ甲州に出奔す。家忠日記曰、退于久野。今従年譜・創業記・松栄紀事　織田信忠進み高遠城を攻む。

二十九日、僧を以て使と為し書を齎（そろ）へ城に入り仁科信盛を降らしめんと諭す。信盛、将佐と之を議る。副将小山田昌行曰はく「此れ詐謀なり。豈に大島・飯田、懦（だ）劣の徒に効（なら）びて名節を堕（おと）さんや。当（まさ）に決死一戦すべきのみ」と。信盛笑ひて曰はく「是吾志なり」と。即ち僧を収め其耳鼻を截（き）り之を逐ふ。信忠大いに怒り貝沼

原に陣し高壓城に登り小笠原信嶺を以て先導と為し之を急攻す。昌行血戦し数力竭(つ)かしめ城に入る。信盛自殺す。昌行及び弟大学・渡邉金太夫等皆死し城遂に陥つ。斬首四百余級。家忠日記・甲乱記・松栄紀事○信長譜曰、斬首二千五百八十級。此拠見行本信長記也。見行本多謬誤。今従織田本信長記駿州江尻城主穴山梅雪、武田勝頼の姉夫なり。雅にして威重有り。勝頼、女を以て其子勝千代に妻(とつ)がしむるを約す。左馬頭信豊、己の子の婦と為さんと欲し、長阪釣間・跡部勝資及び大龍寺の僧麟岳を賂し勝頼に言はしめて曰はく「主公の女、勝千代と五行の運相究まる。典厩の子二郎に嫁ぐに如かず」と。勝頼之に従ひ、遂に其約を渝(かえ)る。梅雪大いに怨望し、潜かに異図を蓄ふ。神祖、長阪血槍九郎をして江尻城に往かしめて按ずるに、長阪血槍信政天文十七年に見ゆ。即ち其の人か。、或は其の子か、未詳梅雪を降に説く。信長(政力)淹留すること七日。禍福を以て諭し、梅雪之に従ふ。血槍九郎復命す。神祖、其の独り敵城に入り善く要領を得るを賞め遠州三邑を賜ふ。梅雪計を未露に反す。

三月朔、我軍の江尻に向くを聞き　松栄紀事曰、三月朔、神祖、至江尻。按ずるに、四日、梅雪初め神祖に謁するも応ぜず。神祖、先に江尻に至る。下文に云ふ、我軍の江尻に向ふを聞き質を奪ふと。今之に従ふ　甲府に質せらるる所の妻子を奪ひ采邑下山城に拠りて叛す。武田勝頼軍を諏訪に駐す。梅雪の叛に及び人心惟だ擾ぎ宗族勲旧悉く離散す。左馬頭信豊亦屢（しばしば）病と称し軍戦に預からず。残兵一千に過ぎず。勝頼、諏訪を保つ能はず、引き帰る。新府の塁壁未だ完（おわ）らず。守禦に不便なり。将佐胥（あい）議り、須らく其来鋭を避け要害に保拠し以て再挙を図るべしと。大郎信勝（勝頼子）独り奮ひて曰はく「衆心離畔（＝離叛）し運命既に窮まれり。其逃遁し辱を受くるよりは快死し志を遂ぐるに曷若（いずれ）ぞ」と。勝頼黙然たり。小山田信茂曰はく「臣の所管都留郡内は阻隘の地なり。宜しく急ぎ之に赴くべし」と。眞田昌幸曰はく「上野吾妻、地の利険固にして芻糧数年を支ふべし。箕輪に内藤有り、小諸に典厩有り。吾妻の藩屏と為すに足る。請ふ速やかに焉（これ）に赴かん」と。勝頼之を然りとす。長坂釣閑曰はく「小山田は累世の旧臣

なり。眞田は新進の士なり。郡内に往くに如かず」と。信茂亦曰はく「都留は本州の地なり。吾妻は他邦なり。本州を去りて他邦に之(ゆ)く。請ふ之を熟計せよ」と。勝頼、其言を善しとす。厚く信茂に酬し之を還迎せしむ。　家忠日記・信長譜・甲陽軍鑑・甲乱記・松栄紀事

三日、勝頼、木曽義昌の質を殺し、諸将の質を納む。三百余人新府城中において之を燔(や)き殺す　信長譜　独り妻孥を挈(たずさ)へ郡内に赴く。従兵狼狽し相顧み哽咽(こうえつ)（むせび泣く）す。鶴瀬に至り報を待つこと七日。信茂来ず。関篠子を設け戍兵を置く。反を以て勝頼を拒み納れず。従兵尚ほ数百人有り。信茂の反を聞き悉く亡げ去る　家忠日記・信長譜・甲陽軍鑑・甲乱記・松栄紀事

四日、穴山梅雪、上原に至り神祖に謁し、刀及び鷹馬を献ず。遠目・鞠子の敵兵梅雪の叛を聞き城を委(す)て潰走す。家忠日記曰、田中・持舟・鞠子三城聞梅雪叛皆降。按ずるに田中・持舟二城前比（さきごろ）既に降る。上文に見ゆ。今松栄紀事に従ふ。○按ずるに武田家譜、梅雪既に神祖に降り其旧

称に復して陸奥守信君と曰ふ。然るに諸書此下皆梅雪と書く。今之に従ふ

是日、織田信長、兵七万余騎を将る安土を発す。創業記・信長譜作五日、今従家忠日記・松栄紀事

六日、濃州呂久渡に至り信忠、高遠の捷将士十八人の首級を上る。信長大いに喜び仁科信盛の首を長柄河上に梟(きょう)す（首を木に吊るす）創業記・信長譜・家忠日記・松栄紀事

七日、信忠甲州に進み入る。一條信龍・清野美作・朝伊奈摂津(ママ)・武田上総等を索(もと)め之を殺す　家忠日記・信長譜

八日、神祖興津に軍す。

九日、満坐に移営す。穴山梅雪来会し前駆を為す。文殊堂より市川口に入る　徳川記曰、神祖、出自殺（ママ）州至川内。挙軍不知道路、井出人斉藤弥右衛門為郷導入自市川口。神祖悦、下令蠲（けん＝清める、消す）弥右衛門揺役。附口備考　諜報して曰はく「勝頼、戦はずして是(走)る」と　年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　勝頼鶴瀬に在り、警備無きを畏れ駒飼山の家に匿る。

其夜、小山田信茂の族八左衛門、信茂の質を奪ひて去る。勝頼の将の保つ天目山土人皆叛す。往くを得ず。近邑田野に匿る。僕圉（馬童）皆亡ぐ。土屋昌恒・秋山紀伊、鞚（おもがいと轡）を執り、阿部加賀・温井常陸槍を持つ。是に先んじ、勝頼の近習小宮山内勝膳ヵ讒に遇ひ黜せらる。来りて昌恒に謂ひて曰はく「吾近譴を蒙り外に在り。臣節を尽くさんと欲せば則ち主公の意に忤ふ。委ね須ば則ち臣節を虧（＝欠）かん。願はくは寛宥せられ死を以て国に報いん」と。因りて「長阪釣間何くにか在る」と問ふ。昌恒対へて曰はく「昨鶴瀬より逸れ去る」と。「跡部大炊如何」と。曰はく「亦逸れり」と。「讒者小山田将監如何」と。甲陽軍鑑、将監作彦三郎。蓋初称也。今従松栄紀事　曰はく「将監、秋山摂津守と亡げ去り、已に旬日を経」と。内膳流涕して曰はく「荷恩の士相踵し逃げ去る。主公の命窮まれり」と。昌恒・紀伊相対し悲泣す。勝頼忸怩として之に謝す。甲陽軍鑑・松栄紀事

臣按ずるに、小宮山内膳の父丹後、武田の世臣を以て信玄に事へ上野松枝城を

守る。頗る驍勇を以て著名なり。内膳剛直にして爾の所生を忝しめず。数佞幸権貴に忤ふ。故に勝頼之を悪む。小山田将監と忿争するに及び、勝頼讒を信じ之を逐ふ。夫れ讒に遭ひ廃せられ黙して怨懟（うらみ）の色無し。此れ固より人臣の分にして未だ愉揚（とりたてて褒める）するに足らず。而れども能く従容と之に処する者既に鮮し。放逐に至り外に在りて居に赴くこと之難し。慷慨激烈危きを見命を授くる者則ち千百人中一二を得難し。豈に曠世（世にまたとない）の義士に非ずや。語に曰はく「疾風勁草を知り、世乱忠臣を識る」と。内膳の若き者其れ以て人臣の勧と為すべし

十日、興国寺の戍将曽根内匠、神祖に降る。牧野康成をして興国寺城を守らしむ。

松栄紀事

十一日、勝頼、甘利甚五郎・大熊新右衛門をして先に天目山に往かしむ。二人亦叛し銃矢を放ち勝頼を拒む。信忠、滝川一益・河尻秀隆をして田野を囲ましむ。

勝頼の兵辻彌兵衛、村氏民ヵと乱を作す。甚五郎・新右衛門、弥兵衛と郷導を為す。一益を迎へ勢甚だ猖獗（しょうけつ）（さかん）なり。勝頼、其妻を小田原に往かせんと諭す 勝頼初娶信長公女姪。生信勝而蚤世。再娶北條氏政之妹 固く同じく死せんことを請ひ聴かず。竟に自殺す。松栄紀事曰、勝頼使小原丹後及弟下総・金丸助六郎先殺妻孥。今従甲乱記 又信勝を諭し累代の重器旗無盾を齎（斉）（そろ）へしむ。循出（こっそり）して行き武州に出で以て奥州に奔ると。信勝、必ずや死すと決志し聴かず。既にして一益の兵四面競進し、勝頼窮蹙し為す所を知らず。昌恒矢を放ち数騎を連ね斃す。矢竭き力（刀）戦す。勝頼、力（刀）を揮ひ昌恒を救ふ。身数創（あまたきず）せらる。信勝、槍を揮ひ奮戦し亦創せらる。父子自殺す。勝頼年三十七、信勝年十六。昌恒・僧麟岳・阿部加賀・温井常陸・小原丹後・其弟下総・金丸助六郎 土屋昌恒兄 ・小宮山内膳・秋山民部・巌下総六郎・多田久蔵等四十一人皆戦死す。年譜・創業記・織田本信長記・家忠日記・甲陽軍鑑・甲乱記・松栄紀事 一益首級を上る。信忠喜び之を賞す。

是日、神祖、新府に入り信忠に会ふ。

十三日、信長信州根羽に至る。信忠使を遣はし勝頼父子の首を献ず。信長大いに喜びて曰はく「城介出師し纔かに一月。甲信駿三州を平定し勝頼父子の首を獲る。厥(そ)の功や伝へん」と。福冨平左衛門をして荒波刀・駿馬及び暑衣一百領を信忠に賜はしめ以て之を賞す。　家忠日記・信長記・松栄紀事

臣按ずるに、昔東野子の善御や（東野子という名馭者は）歩・驟(しゅう)（こまた駆け足）・馳(ち)（早く走らせる）・騁(へい)（まっすぐに走らせる）意の如(ごと)からざる無し。然れども馬力尽く。武田信玄五州の兵を擁し、戦へば必ず克ち、攻むれば必ず取る。威稜（際立つ威光）隣国を憺(たん)平（おちつかせる）にす。然れども民力殫(つ)く（つきる）。人其威を畏れ、其恵を懐(おも)はず。離叛の心隠然として已に其中に伏す。勝頼、智伯瑶の才有りて魏侯の徳無し。讒に其兄義信を殺して嫡を奪ふの計功なり。信玄の聴察（判断力）愛に溺るるを以て弁ずる能はず。嗣立するに及び彊暴にして陵人驍武(りょうじんぎょうぶ)たり。自矜し親(みずか)ら諂諛(てんゆ)（こ

びへつらう）の小人を近づけ老臣宿将を疎斥（そせき）す。賄賂公行して（公然と行なわれ）清議を畏れず。将士憤邑して軍政を恤（うれ）へず。佳兵已に剛からず、復烏（またいずく）んぞ用ゐんや。賈勇（勇を誇ること）、丹閔（たんびん）（心づかい）に過ち拒諫（いさめをこばむこと）於慕容（ママ）超甚だし。宗族内訌（内紛）し士民外叛す。二十八葉の世家一朝にして蕩滅澌尽（しじん）す。其由（よ）る所を迹（たず）ぬるに信玄不仁（仁がない）にして、其人心を失ふこと久し。信勝弱齢にして尚義なり。偸生を以て苟免（こうめん）せず（一時しのぎに安楽せず）、之をして長ぜしめば、涖（り）（位につく）政の心観るべき有らん。惜しいかな

十四日、大給城主松平左近眞乗卒し、子源二郎家乗嗣ぐ。家忠日記、源二郎時八歳。後為和泉守

十五日、信長、飯田に至り、勝頼父子の首を梟すること数日。松栄紀事　是に先んじ、下曽根某、左馬助信豊を信州佐久郡に殺す。葛山右近氏友　左衛門佐信名子　・甘利右衛門も亦殺さる。武田系図　信長、信豊の首を獲り長谷川宗仁をして勝頼父子・信豊の

三首級を齎（斉）へ京師に往かしめ之を梟す。諸将に命じ兵を分け、逍遥斬（軒）信綱・小山田信茂・朝比奈駿河・今福筑前・長阪釣間・跡部勝資等と党するを逮捕す。数十人皆殺さる。信長譜・松栄紀事　小笠原氏儀、勝頼の敗死を聞き小田原に出奔す。信長、北條氏政をして之を殺さしむ。氏政其首を浜松に送る。創業記・小笠原家譜此皆非是日之事、拠本書終書之　初め信長重き利を以て甲府将士に啗（くら）はせて曰はく「款を送らば則ち駿州を授く、或いは信州の半を給ふ」と。将士皆之を信ず。以て叛し勝頼の滅ぶに及び、免を得る者什（＝十）に二三。信長譜・松栄紀事

臣按ずるに、信長公の甲府将士を餌するは、即ち武田信玄、駿河の将校を欺くの故智にして、当時更事の者（経験者）皆目撃する所にして或いは其謀に参預する者なり。信玄の死を距て纔かに十年、豈に皆之を忘れんや。唯だ其貪禄徼（きょう）（もとめる）利の念甚だ重くして憂君報国の心甚だ軽きのみ。彼の虓（こう）（ほえる）虎雄武の士皆謂（おも）ふ、建牙竪纛（じゅとう）（天下取り）を以て安富尊栄、子孫に延及すべしと。而して、悟

然として陥穽（おとし穴）の中に坐するを知らず。哀しむべきのみ。宋利覯（ママ）所謂武夫健将降を売り後を恐るゝは何ぞや。詩書の道廃れ人惟だ利を見て義を聞かざるのみ。焉、豈に啻だ秦の失政のみならんや。亦た以て万世の鑑と為すべし。

十九日、信長、上諏訪に至る。従兵十万の軍容甚だ盛んなり。

二十日、木曽義昌、信長に来謁し、筑摩・安曇二郡を授けらる。木曽を領すること故の如し。

是日、神祖諏訪に至り信長に謁す。神祖の功を称めて曰はく「長篠の戦に甲信の驍勇殆ど殲す。故に成功甚だ易かりき。此れ卿の力なり」と。家忠日記・信長譜・松栄紀事

駿州の諸城相継ぎ神祖に降る。独り依田信蕃田中城に在り、下らず。終に守るべからざるを知り、城を大久保忠世に致して去る。神祖、山本成行をして之を諭し降らしむ。家忠日記、成行作成氏。永禄十一年作成行。與松栄紀事合。今拠此訂之 信蕃、勝頼の存亡未だ審らかならざるを以て従はず、信州に出奔す。信長甲州将士を殺すに及び将に

捕へて之を殺さんとす。神祖、密かに人をして之を召さしむ。信蕃命に応じ市川の営に来謁す。神祖、之を二股山家に匿し免せらる。松栄紀事正文曰、二月十八日、神祖入駿州諭信蕃曰、欲戦即戦、欲降即降。不可首鼠両端自取福敗。信蕃対曰、吾与大久保忠世有旧、須使忠世来。神祖遣忠世諭之。信蕃致城出奔甲州。紀事一説与家忠日記合、今従之

二十一日、穴山梅雪、神祖の先を以て信長に上謁するを容(ゆる)さる。信長、其旧邑を授く。松栄紀事○本書曰、小笠原信嶺亦以神祖之先、容謁、信長授旧邑、按ずるに、信嶺の帰降下文六月に在り。故に取らず

二十三日、信長州郡を功有る将士に割与す。滝川一益を以て関東管領と為し、上野及び信州佐久・小県二郡を賜ひて曰はく「関東八州以て奥州に至る。征伐獄訟は汝の裁決を取れ。如(も)し智慮の及ばざる所有らば須らく家□卿と議し其処するに任すべし」と。甲州及び信州諏訪郡を河尻秀隆に、更科・高井・水内・埴科四郡を森長可に、伊奈郡を毛利河内守に分け賜ふ。

二十九日、信長駿州を神祖に授く。約の如し。　家忠日記・信長譜・松栄紀事係二十三日。今従創業記　是に先んじ、菅沼満直父子及び其族新三郎叛し、信玄に降る。勝頼に従ひ長篠に戦ふ。是に至り信長に降り、河尻秀隆の営に在り。神祖其叛乱を悪み信長に告げ之を殺す。　創業記

四月三日、信長、信忠を諏訪に留め甲府に至り廃墟を歴覧す。佐佐木二郎、甲州恵林寺に匿る。信忠、川尻秀隆をして之を索めしむ。僧徒密かに二郎をして亡げ去らしむべからず。信忠怒り将佐をして火を恵林寺に縦（はな）たしむ。僧徒の焚死する者八十四人。　家忠日記・信長譜・甲陽軍鑑・甲乱記

十二日、信長富士山を望見し大宮に至る。神祖出で之に謁す。置酒歓娯し夜に至りて罷（まか）る。信長悦び吉光短刀・一文字刀及び駿馬三を神祖に贈る。凡そ神祖の管内駅亭橘（橋）道修営悉く備はる。　年譜・創業記・信長譜・家忠日記・松栄紀事　奥平信昌出で信長を迎ふ。信長長篠の功を称め之を褒奨す。　創業記・松栄紀事

十六日、信長天龍川に至る。神祖、小栗仁右衛門・浅井道忠をして浮梁を造らしむ。信長黄金を二人に賜ひ之を労ふ。

是日、信長浜松城に至る。神祖之を享す。信長、酒井忠次を召して曰はく「今天下粗定まる。此れ家□卿連年勝頼を挫くの功なり。汝輩の勤めは我馬を労はる。吾甚だ嘉尚」と。又其臣菅屋九右衛門を召して曰はく「吾東国を経略せんが為に栗二万石を東條に儲ふ。今勝頼既に滅び北條氏政風を望じ帰附す。家□卿東方を平定し又何ぞ用兵運糧の有あらん。宜しく此の栗を以て有功の将士に頒け給ふべし」と。神祖、起謝す。創業記・織田本信長記・家忠日記・松栄紀事

十七日、信長吉田に至り酒井忠次之を享す。信長黄金二百両及び眞守の佩刀を忠次に賜ふ。

二十一日、信長安土に凱旋す。

五月九日、神祖、安土に如き以て甲州辺を平定するを賀し、駿州を得るを謝す。

穴山梅雪焉（これ）に従ふ。信長、高野藤蔵・長板助一・山口太郎兵衛をして警備を設け橋梁を修し、以て之を接得せしむ。明知光秀をして具を設治せしむ。光秀仮館を構へ厩櫪を造り金銀を以て膳を飾り饗す。供張甚だ盛会なり。羽柴秀吉備中に在り。毛利右馬頭輝元と相持（あいじ）す。輝元、右馬頭元就嫡孫、備中守隆元子、後剃髪号宗瑞 援兵を信長に乞ふ。信長、池田信輝・其子勝九郎之助後任紀伊守・長岡與一郎忠興兵部大夫藤孝長子政細川氏歴赴（ママ）中守参議従三位、為肥後熊本城主。剃髪号三齊 及び光秀等をして之を救はしむ。別に人をして光秀に代へ神祖を饗せしむ。光秀大いに怒り饗膳の什器を湖水に棄つ 年譜・創業記・家忠日記・信長譜・松栄紀事○信長譜・年譜附尾曰、先是、稲葉一鉄之士那波和泉斎藤内蔵助有故去而事光秀。光秀善遇之。一鐵怒与光秀相訟。信長命光秀還和泉於一鐵、使内蔵助自殺。猪子兵助為光秀甲（申カ）理。故内蔵助免死、事光秀如故。信長思其違法令、召光秀譴責之。捽其頭殴之、二三。人嘗宴将佐。信長被酒辱光秀於衆中。既而命享神祖於他人。故光秀銜之遂反

十五日、神祖、安土に至り信長の館大寳坊に於て謁す。黄金三千両・馬甲三百を

信長に進む。　黄金・馬甲拠創業記、本書曰、信長送還一千両、以為神祖游于京都之用度

十九日、信長、雑劇を総見寺に設け、以て神祖を宴す。

二十日、神祖を高雲寺亭に享す。信長自ら饗膳を供す。穴山梅雪及び酒井忠次・石川数正等に至り、手づから殽蔌（こうそく）（骨付き肉や野菜＝料理）を授く。宴畢り信長、神祖の手を執り、以て殿守に登り、同じく四方を覧じ歓笑す。夜分にて罷る。神祖に勧むるに、京師及び摂州・大阪・泉州界津に游べと。長谷川秀一をして之を導かしむ。　老人雑譜曰、信長、使長谷川藤五郎導神祖、其実使伺間図之也。光秀不反則神祖幾危矣。按ずるに、信長公、実に害心有らば則ち必ずしも相継ぎ京師に入らざらん。蓋し後人之を憶度し説くなり

二十一日、　年譜作二十二日。今従創業記・家忠日記・信長譜・徳川記・松栄紀事　神祖、安土を出て京師に入る。

二十八日、大阪に至る。

二十九日、界津に至る。　年護（譜カ）・創業記

是日、信長、将佐をして安土に留守せしめ、近臣百五六十人を率ゐ京師に入り、将に神祖に会はんとす。権（かり）に本能寺に居り、信忠妙覚寺に居る。是に先んじ、明知光秀、軍装を弁ぜん（はからう）が為に丹波亀山城に還る。怏々（おうおう）志を得ず。親将明智左馬助（初称三宅彌平次、光秀授氏）・斎藤内蔵助利三等と謀反す。

六月朔、兵を率ゐ亀山を発ち揚言するに「明朝京に入り須らく主君をして我軍容を観せしむべし」と。

二日、黎明本能寺を急襲す。信長驚き「反する者は誰ぞ」と問ふ。森蘭麻呂長定（三左衛門可成第四子、長可弟。主図合結記作長次。今拠諸士伝略、訂之）出て之を見て曰はく「惟任日向守なり」と。（信長公、嘗改光秀氏曰惟任。故称之）即ち長定等をして之を防がしむ。光秀進み之を攻む。長定・其弟力麻呂長隆・坊麻呂長氏（二人名拠諸士伝略）宿直者皆奮戦して死するに及び、信長数人を射殺す。弦絶ち槍を揮ひ出で闘ひ左肱を傷せらる。事為すべからざるを知り火を放ち自殺す。時に年四十九。信忠、変を聞き本能寺に

馳せ至り中路に煙の起つを見、事敗るるを知る。二条城に入り村井春長軒をして誠仁親王（陽光院）及び皇孫に（後陽成院）奉ぜしめ駕を趣し禁省に入る。兵を勒し（引きしめ）以て待つ。日午（正午）光秀進み城を囲む。信忠力戦し自殺す。年二十八。弟源三郎勝長（即御坊麻呂質于甲州者）及び従兵百五十余人皆戦死す（信長譜曰、村井春長軒・福富平左衛門・菅尾九右衛門・団平八等四十余輩共死。蓋挙大数也。今従家忠日記・松栄紀事）

臣按ずるに、信長公当に少年時放蕩不羈なり。日武を講る（練ずる）を以て業と為す。其志固より凡ならず。然れども其挙動人君に似ず。宗党離叛す。故に平手政秀死を以て諫し一旦幡然として過を改む。運筹（謀）決策常に意表に出入す。斎藤龍興を走らせ今川義元を馘す（殺す）。威名四境に震ひ、尾濃の間に雄峙す。将軍義昭公の入るを求むるに方り、克く（闃＝宮中）闘職を修め群匈を誅鋤（全滅させる）す。終に能く義昭公をして京師に帰るを得、以て覇業を継がしむ。厥の功偉なり。然るに神祖の力を藉かずは則ち進取の功を建つる能はず。故に神祖と講和し、

甲府の勍敵を捍がしむ。絶えて東顧の憂を無くして専ら力を江越の敵に用ゐるを得。此れ其の本謀なり。既にして義昭公敵国離間の計に陥ちて反し公（信長）を図らんと欲す。公再び兵を挙げ之を河内に放ち、遂に京師に建牙する（武力統一の旗をたてる）を得、天下に号令す。市人宗運の至孝を賞し塩川国満の政績を嘉す。亦、志頽綱（すたれた規約）を振ひて風化（教導感化）を興すに存す。人を知り善く使ふ。秀吉公を行伍の中より抜き以て関西の任を以て委ね山陽の地殆ど将に版図に帰せんとす。其規模亦大なり。然れども資性褊狭（心狭く人を受け入れない）過ちを疾悪（ひどく憎む）すること甚だし。人或は過ち有らば終身之を忘る能はず、必ず屠戮に至りて慊ず。故に明知光秀、其の必誅を懼れ謀反を決意す。変起き倉猝（にわかに）に父子行営に殲ぶ。光秀の弑逆の罪固より天地の容れざる所にして、公亦以て自ら取る有るなり。旧悪怨を念はず是れ用ゐること希難なるかな。

前田玄以、信忠の遺命を受け其子三法師を奉じ尾州清洲に至る。時に三歳 玄以号徳

善院。以有才幹信長公父子見親任。及秀吉公為執政、居五奉行之一。相伝延暦寺之衆徒也。拠慶長十九年大仏供養之時僧正天海之語、真言宗僧而非台徒也。三法師長而名秀信。至正三位権中納言。世称岐阜中納言

神祖、界津に在り。変を聞き大いに驚き、将佐に謂ひて曰はく「吾京に入り信長の為に賊を討たんと欲す」と。従士鞭を挙げ将に進まんとす。本多忠勝諫めて曰はく

創業記曰、井伊直政上諫。一説本多忠勝松栄紀事作忠勝。与創業記正文合。今従之

「光秀大軍を擁す。我兵は単弱なり。勢敵すべからず。一戦敗られなば則ち唯だ当時に笑ひを取るのみならず、亦必ずや後世に譏(そし)りを貽(のこ)さん。国に還り義旅(軍隊)を糾合し以て賊臣を討つに如かず。此れ万全の策なり」と。酒井忠次・石川数正亦其謀に賛成す。神祖、之を然りとし、乃ち帰路の由る所を問ふ。長谷川秀一曰はく「宜しく伊賀・伊勢に由るべし」と。即ち秀一を以て前駆と為す。

家忠日記・松栄紀事並曰、神祖至宇治川時、無郷導不弁浅深。忠次進曰、倉猝間豈遑他求、吾為郷導。沿河覓得一小船、使神祖乗之。忠次策馬絶流。従士亦皆騎而得渡。勢田城主山岡美作守景隆其弟対馬守景佐馳至導之。山路険悪寇賊充塞。景隆兄弟撃却之。按ずるに、神祖、実は伊賀路を

経。若し宇治川を渡らば則ち伊賀路を経る能はず。況や此の川騎ると雖へども渡此の如く容易なるを得ず。且つ之を渡らば則ち光秀の陣前を過ぎ其管内に及ぶ。其の誤明かなり。蓋し界津より大和を経伊賀路に至るの間、或は河水有り、忠次先導し偶（たまたま）其の名辺（奈辺＝どのあたり）なるかを失ふ。以て勢田城主馳せ来る。故に後人宇治川と為さんか。諸士伝略曰はく、神祖界津を覧、飯盛山を下り将に京師に還らんとし、本多忠勝を大阪に遣はす。路に茶屋四郎に逢ふ。馬に策し馳せ至り忠勝に謂ひて曰はく「洛中煙焔を見ず。光秀簒殺し、京師焦土なり」と。忠勝半途にして還り飯盛山下に至り神祖に告ぐ。神祖大いに驚きて曰はく「光秀定めて我が帰路に邀つ。寡衆与（とも）に戦ふに足らず。自殺するに如かず」と。将に刃を挺かんとす。忠勝諫めて曰はく「此に死すも敵に死すも其死は一なり。国に還り兵を挙げて賊を討つに如かず」と。神祖曰はく「善し。然れども帰路由る処を知らず」と。忠勝曰はく「臣能く知る所なり」と。乃ち大鎗を提げ一村に至り父老を劫（おびや）かして曰はく「我将に参州に抵らんとす。汝須らく之を導くべし」と。父老懼びえ之を導き佗村に至る。前の父老を赦し之を還す。又父老を劫かし之を導かしめ数十村を皆此如くに歴、遂に木津川に至る。偶柴船二艘来たる有り。忠勝舟子を呼び之を済（わた）さしむ。舟子肯へんぜず。忠勝怒り鳥銃を以て之を劫かす。遂に神祖をして之に駕せしむ。士卒皆渡るを得。進み多羅尾谷に至る。

多羅尾某、人をして神祖を享すを請はしむ。神祖之を疑ふ。忠勝曰はく「我兵の多寡、主客敵せず。彼若し光秀に党せば撃戢（我カ）何ぞ難からん。其情の実何ぞ知らんや」と。神祖之を然りとす。多羅尾某大いに喜び厚く神祖を享し、士卒を進め管内を護送す。遂に伊賀に至る。忠勝、服部半蔵に謂ひて曰はく「伊賀は子（し）の家邑なり。子須らく代り先導を為すべし」と。神祖之を善しとす。進み勢州四日市に至り舟に駕し参州に還るを得と。之に拠れば則ち宇治川は蓋し木津川の訛なり。然して神祖実は、竹内嶺・桜井・初瀬・高見嶺を歴。則ち木津川を渉らずして伊賀に至る。其先導する所一は以て忠次と為し、一は以て忠勝と為す。二説各異なる。勢田亦伊賀路に非ずして光秀の陣に近し。且は山路の険悪無し。蓋し景隆兄弟大和路に来、之を迎ふ。従ひて伊賀険路を歴る者なり。諸説紛紛として適従する所無し。併存し以て識者を俟つ

神祖大和路を出んと欲し使越知玄蕃をして郷導を求めしむ。玄蕃其臣吉川某を大和河内の界竹内嶺に遣はし以て之を導かしむ。土寇石原源太兵を率ゐ之を邀つ。吉川某玄蕃の命を以て諭す。土寇引き去り吉川某桜井初瀬を経高見嶺に至る。伊賀・甲賀の人出て神祖を導く。年譜附尾○創業記亦載神祖出大和路

初め信長、伊賀土人を侵掠し少長無く（老いもわかきも）悉く之を殺す。他州に逃

遁する者、所在之を出さしむ。敢へて匿す者罪有り。神祖之を矜(あわ)れみ一人として報を出さず、之無しと曰ふ。故に其参河・遠江に在る者皆免るるを得。親族之を聞き其恩を感載(戴)す。是に至り、服部別当貞信等力を併せ寇を禦ぐ。神祖遂に恙(つつがな)く江州信楽に至るを得。松栄紀事、但云、貞信従至信楽、而不書其故。今拠岡崎物語 多羅尾氏世(よよ)信楽を領す。秀一と多羅尾四郎兵衛光俊と旧故有り。神祖の艱楚を告げ、光俊宿に迎ふ。其家の高力清長輜重を護るに、賊之を侵掠す。清長屢(しばしば)還り闘ひ創せられ遂に之を攘斥す。高力系図・松栄紀事 神祖、伊賀より伊勢に至り柘植三之允を以て先導を為さしむ。初め神祖、穴山梅雪と同じく還らんと欲す。梅雪難疑を聞き懼れ神祖と路を異にす。狼狽し山城草内渡に至り村民の殺す所と為る。年譜・創業記・家忠日記・徳川記皆云、梅雪至宇治田原被殺。年譜附尾云、穴山梅雪後于神祖十余町、為石原源太所殺。越智玄蕃聞之、其夜撃殺源太。此又一説也。先臣佐佐宗淳曰、諸書皆誤。梅雪死於草内渡。土人猶能説其事。其墓見在草内渡。今従之

三日、神祖勢州白子に至る。角屋七郎二郎舟を進む。神祖之を賀す。按ずるに六月二日

光秀信長公を弑す。神祖界津に在り之を聞く。界津は京師を去ること十四里。登時界を発すと雖へども当に暮夜に及ぶべし。其大和・伊賀・近江を経て伊勢に至る行程四十里ばかり。険路有り、土寇有り。豈に能く三日に白子に至るを得んや。況んや多羅尾光俊宿に迎ふる有るをや。其蜜（密カ）諸書或は云ふ「淹留三日」と。然らば則ち諸書所載の日辰（時）皆誤りなり。然れば今考訂する所無し。姑（しばら）く本書に従ふ

四日、参州大浜に至り永井直勝の家に入る。参州の将士歓迎し之を賀す。創業記・家忠日記・徳川記 是に先んじ、長谷川宗仁使を備中に馳せ変を羽柴秀吉に告ぐ。秀吉、毛利輝元と講和し軍を還し以て明智光秀を討つ。太閤記・秀吉譜

五日、神祖岡崎城に入る。伊勢・尾張の将士使を遣はし款（よしみ）を送る。

六日、書を岡部正綱に賜ひ甲州下山城を経営せしむ。家忠日記

七日、本多信俊・名倉喜八郎を甲府に遣はし変を河尻秀隆に告げ、且（しばら）く之を保護せしむ。家忠日記・松栄紀事

八日、神祖明智光秀を討たんと欲し戒厳を下令す。家忠日記 織田七兵衛信澄武蔵守信行

子、信長公姪　光秀の女婿なり。其父信行、信長の殺す所と為るを以て恒に報仇の志有り。時に大阪城に在り。兵を率ゐる将に京師に入り力を光秀と勠(あわ)せんとす。織田三七信孝　信長公第三子　丹羽長秀と大坂を攻む。信澄敗死す。秀吉譜　信孝将に光秀を討たんとし長秀及び池田勝入と方略を議す。信輝以信長公薨、下髪号勝入

十一日、羽柴秀吉富田に至る。信孝に謁し涕泣し之に吊(弔)ふ。家忠日記

十三日、秀吉、光秀と山崎に戦ひ之を大破す。光秀敗死す。秀吉其屍を粟田口に磔す。清洲に抵(いた)り三法師に謁し之に吊(弔)ふ。織田信雄　信長公第二子、小字茶筅麻呂、出継北畠源其（具）教卿為伊勢国司、後封尾張至正二位内大臣、剃髪号常眞　信孝・長秀・勝入来会す。滝川一益関東より至り、柴田勝家越前より至り、亦此に会う。家忠日記・秀吉譜・松栄紀事

十四日、神祖兵を将ゐる岡崎を発し鳴海に軍す。甲信の戍将変を聞き城を守る能はず。森長可川中嶋を棄つ。道家彦八小諸を棄つ。毛利河内守伊奈を棄つ。皆京師に走る。甲州繹(えき)騒す（騒ぎが続く）。家忠日記・徳川記

是日、川尻秀隆、本多信俊を殺す。秀隆勇にして仁ならず。威を以て之を脅制せんと欲す。甲州人服せず。信長の殺さるるを聞き秀隆を□（詐カ）して曰はく「家□卿、本多百助を遣はし秀隆を殺す」と。秀隆之を信ず。信俊至るに及び、宴を設け之を享す。伺ひ、其の酔ひて寝るに乗じ之を刺殺す。

十八日、村民遽（きょ）起し秀隆を攻む。故に山縣昌景の兵三井弥一郎、秀隆を撃ち之を殺す。甲州大いに乱る。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・松栄紀事

十九日、羽柴秀吉使を遣はし賊臣明智光秀を討ち平ぐるを鳴海の営に告ぐ。

二十一日、神祖尾州より岡崎に班師す（軍を引き返す）。年譜・家忠日記・松栄紀事　羽柴秀吉、丹羽長秀・池田勝入等と三法師を奉り信長の嗣（し）と為す。安土の城に徙居し封ずるに近江三十万石の地を以てし、長谷川丹波守・前田玄以をして之を補佐せしむ。其の幼穉（＝幼稚）なるを以て叔父信雄をして管摂せしむ。州郡を分割し尾張を以て信雄に封ず。美濃を信孝に、丹波を秀吉に、近江長浜を柴田勝家に、摂津・大阪・

尼崎・兵庫を勝入元助に、若狭及び近江高島・志賀二郡を滝川一益に。家忠日記・秀吉譜・松栄紀事　神祖、大須賀康高と成瀬正一松栄紀事作一斎、按ずるに、一斎正一の弟なり。成瀬系図に拠れば流亡者を招徠するは正一なり。今之を訂す・日下部定好・岡部正綱及び故穴山梅雪の部曲をして甲州の士を招徠（しょうらい）（招致）せしむ。康高市川に在り、之を綏撫（すいぶ）（安んじいたわる）す。又足高山麓天神川の故墨を修し稲垣平右衛門長茂をして之を戍らしむ。長茂初称藤介、平右衛門重余子、此時為石川康通之臣　本多正信を以て使と為し依田信蕃を諭し士人を招諭せしむ。信蕃栢阪嶺に建旗し之を招く。横田重量衆に先んじ来帰す。相継ぎ帰附する者千余人。信蕃之を率ゐ小諸城に入る。家忠日記・松栄紀事　甲斐・信濃・上野三州守無し。故に隣国の諸将皆之を覬観（きかん）す（うかがう）。上杉景勝三千余騎を将ゐ河中島を取る。北條左京太夫氏直三万余兵を将ゐ甲州を取らんと欲す。氏直、氏政長子、松栄紀事三万余兵五万余騎、今従徳川歴代　甲州人大村三右衛門其子伊賀、氏直に通謀し秩父新太郎の兵を導き甲州に入る。松栄紀事曰、新太郎、北條氏康之子。按ずるに、北條家譜、氏康子秩父新太

郎無くして氏政の第五子新太郎を称する有り。名闕く。蓋し其領秩父を以て称を秩父と就くるなり　期を刻し約を定め新太郎刈阪口より武州甲州之界　北條左衛門大夫氏勝　上総介綱成孫常陸介氏繁子。徳川記・徳川歴代作右衛門氏堯。　今従松栄紀事　八千余騎を率ゐ郡内口より、北條安房守氏邦　氏康第三子氏政弟、武州鉢形城主　七千余騎を率ゐ　徳川歴代作三千余人、今従家忠日記　恵林寺口より甲州に入らんと欲す。三右衛門碓氷川に陣し　碓氷或作碓日笛吹国音相通　新太郎の至るを待つ。樋口某神祖に納款し密に其事を告ぐ。神祖梅雪の部曲有泉大学・穂阪常陸をして速やかに碓氷川に赴かしめ之を撃破す。賊敗走す。新太郎之を聞き進む能はず兵を引きて退く。

二十二日、神祖書を大学・常陸に賜ひ之を褒む。樋口某を召し麾下に列す。三右衛門の乱、日を不ずして平ぐと雖へども寇賊蝟集し余党煽起す。神祖大久保忠世を以て将と為し石川康通・本多廣孝・其子康重・岡部正綱と甲州を経略せしむ。忠世佐久郡に至り康通・正綱と相識る。諏訪小太郎頼忠をして帰款せしむ。　頼忠、

新二郎満鄰子　大草左近知久・大和頼元・下條某等皆降る。小笠原信嶺、菅沼定政に就き降る。神祖之を許す。

二十四日、松平與二郎忠吉卒す。年二十四。其子信吉出て松平信一を継ぐ。故に神祖、忠吉の姪（おい）内膳正家廣を以て嗣と為す。　家忠日記・松栄紀事・桜井松平系図

七月三日、神祖甲州を平定せんが為に兵を将ゐ浜松を発す。

四日、田中に至る。

五日、江尻に移営す。

七日、大宮に陣す。

九日、甲府に至る。　年譜・家忠日記・松栄紀事　是に先んじ、武州の兵、成瀬正一と通款す。正一其流亡を閔（あわれ）み之を往訪するに郷閭（きょうりょ）（村里）人無し。正一其門に題して曰はく「来るべし、市川・筧、成瀬吉右衛門」と。其夜武川隊長小倉内藏助忠継　按ずるに、今川氏真の隊将、小倉内蔵助資久有り。永禄十年見ゆ。蓋し其子か。未詳　・折井一左衛門次昌来到

す。正一、二人をして神祖に謁せしむ。忠継・次昌質を献じ帰降す。　成瀬系図

十四日、神祖書を酒井忠次に賜ひ信州十二郡を給ふ。　按ずるに、延喜式・倭□類聚抄・拾芥抄信濃十郡。家忠日記・松栄紀事並び云ふ十二郡と。家忠日記、神祖賜ふ所の書に載せて曰はく信州十二郡と。蓋し後世二郡を増し置くなり。今考する所無し。酒井系図曰はく神祖書を賜ふこと此の如しと。然れば故有らん。□□

忠次東三河の兵を率ゐ諏訪に至り諏訪頼忠をして来属せしむ。忠次綏撫（すいぶ）に短にして人心服さず。頼忠憤恚（ふんい）して曰はく「吾家□卿に属す。何ぞ忠次の指麾を受けんや」と。城に拠り堅守し以て忠次を拒む。神祖、大久保忠世及び折井次昌・権田織部泰長を諏訪に遣はし頼忠を諭して曰はく「忠次の言の如くに非ず。当に神祖の麾下に属し攻戦の功を励むべし」と。頼忠其臣茅野丹波房清・澤一左衛門房重を甲府の営に遣はし之を謝す。神祖衣物を二人に賜ひ懇ろに之を諭す。頼忠其子頼水　家忠日記作頼永。今従寛永系図・松栄紀事　と甲府に抵（いた）り神祖に謁す。神祖名刀を頼忠に賜ひて曰はく「信州の将士猶ほ未だ帰順せざる者有り。卿宜しく速やかに諏訪に帰り以

て後命を待つべし」と。頼忠父子命を奉じ諏訪に帰る。神祖豆州柾戸の塁を築き牧野康成をして興国寺城より徙(うつ)らせ之を守らしむ。久能宗能守るを助く。

十五日、書を小倉忠継・折井次昌に賜ひ武川の士を招諭せしむ。忠継・次昌運籌(うんちゅう)（謀をめぐらす）招諭す。柳沢兵部・伊藤三右衛門・曲渕勝左衛門吉景・曽根孫作・曽雌(そし)氏部・折井九郎三郎等六十余人皆来降す。神祖、忠継・次昌の功を賞し、帰順の士の食邑を故(もと)の如くに賜ふ。北條氏直招くと雖へども武川の士従はず。間に小沼堡に拠り氏直に属する者有り。帰順の兵之を撃破す。

二十二日、酒井忠次東参河の兵及び小笠原信嶺等を率ゐ諏訪郡高嶋城を攻む。家忠日記・松栄紀事

二十四日夜、城兵、松平又七郎家信の営を襲ふ。家信、紀伊守家忠子、時年十二 家信年幼と雖へども家臣武事に長(た)けたる者多し。日夜厳しく備へ隊伍乱れず。故に能く之を拒ぐ。敵兵利あらずして退く。

二十六日、松平主殿助家忠伏を設け城兵を撃破す。神祖其功を褒む。

是日、依田信蕃に信州諏訪・佐久二郡を賜ひ之を奬励す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事、按ずるに、上文に酒井忠次に信州十二郡を給ふと。然るに故有りて果たさず。故に二郡を信蕃に賜ふ

八月、北條氏直兵四万余騎を将ゐ碓氷嶺を踰へ佐久郡に入る。上杉景勝神祖と講和するを聞き、眞田昌幸に吾妻城を還し以て越後の兵に備へしむ。武田勝頼滅後、上野諸将多属北條氏政。昌幸亦然 酒井忠次、氏直の出兵を聞き高島の囲を解き白須に至る。神祖甲州に在り。大草左近知久・頼元及び其子式部少輔頼氏・下條某に旧邑を授け信州伊奈に赴く。柴田康忠をして佐久郡を守らしむ。

三日、酒井忠次・大須賀康高・大久保忠世・本多廣孝及び其子康重・石川康通・岡部正綱三千余騎を率ゐ白須を発し音骨に屯す。或作乙乞。国音相同

六日、氏直進み梶原に至る。我兵と相距つること纔かに一里。山嶽高峙し互に相知らず。忠世の兵石上菟角（とかく）、蘆田堡に在り。之を聞き険を冒し来告す。忠世土人

を遣はし其実を探らしむ。果たして然り。諸将兵寡く敵し難きを慮り議し班師せんと欲す。初め忠世諏訪頼忠を来属せしめんと諭す。忠次之を激まし叛せしむ。故に忠世之を衒(ふく)む（ねにもつ）。是に至り忠次・忠世殿(しんがり)を争ひ忿言す。時を移し氏直の兵来進し、諸将和解す。先に忠次をして営を焼き退軍せしめ、康高相従ふ。次に康通次に忠世次に康孝次に故穴山梅雪の部曲、次に正綱殿(しんがり)を為す。松栄紀事曰、第一忠次、第二康高、第三康通、第四忠世、第五廣孝、第六正綱。今従家忠日記 各其列を正し隊伍整粛なり。小田原の兵山尾（山裾のことカ）を循(めぐ)り六将を撃つ。或は還り闘ひ或は引き去る。行程七里、凡そ十余戦。正綱勇を奮ひ数(たびたび)敵を撃ち之を却く。神祖故府に在り。之を聞き新府に馳せ至る。石川数正をして之を救はしむ。氏直援軍の衆多きを見、敢へては進まず。若御子に屯す。我軍三千、一人も損はず皆新府に還る。俗に之を繰引(くりびき)（おびき出す戦法）と謂ふ。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

是日曲渕吉景出で敵軍を覘(うかが)ひ山上郷右衛門と語を交はし相闘ふ。神祖書を賜ひ之

を褒む。　家忠日記・松栄紀事

七日、氏直進み新府に迫る。我軍水を隔て中山に陣す。相距つること十余町。平巖親吉兵を山下に伏せ敵七人を殺す。　年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　筒井内蔵忠次戦死す。天野重次・近藤秀用戦功有り。　松栄紀事　氏直将に新府を攻めんとす。神祖浅生原に陣す。兵を分け三隊と為し以て之を待つ。忠次・忠世・康高・康通・廣孝・正綱及び梅雪の部曲をして兵を各所に伏せしむ。氏直候騎を遣はし之を覘しむ。帰りて言ふ、戦必ず利あらずと。氏直意を決し戦はんと欲するも、将佐畏懦（畏れ気弱になる）し進む能はず。氏直已むを得ず相待つこと数日。

十日、神祖陣を新府に移し鳥居元忠・松平清宗・水野勝成・三宅康貞をして故府を守らしむ。新府城を修繕せしめ以て若御子に備ふ。松平源七郎康直、弟孫三郎を遣はす。康直上野介康忠子、世称長澤家。後襲称上野介。按ずるに、松平系図、康直の弟孫三郎と称する者無し。而して源介直隆・石見守直宗・小太夫直之三弟有り。某一初め孫三郎と称する者有らんか。未詳　大久保忠

世、弟忠教を遣はし以て之を戍(戍)らしむ。北條氏政小田原に在り、軍事を議す。兵を甲州に益し氏直の軍と神祖を挟撃せんと欲す。弟左衛門佐氏忠を以て将と為し、其弟右衛門佐氏光及び其族氏勝副として一万余騎を率ゐ郡内に入る。

十二日、氏忠三阪城を出で黒駒に至る。氏直謀りて曰はく「浜松の兵善光寺及び故府を戍る者料（食料）必ずや多からず。氏忠をして二墨を襲はしめん。火を放ち急攻せば、二墨の兵かならずや是(走に)げん。新府の兵之を聞き亦当に自潰すべし。勢に乗り急ぎ撃たば則ち家□卿新府を守るを得ず。当に下山を申し駿州に避け入るべし。追撃せば必ず大勝を得ん」と。乃ち氏忠と定約す。氏忠上口山に陣し其報を待つ。人其計を故府に密告する有り。元忠・勝成兵を率ゐ急ぎ故府を発す。康貞・清宗亦出兵し上口山を攻む。氏忠意(おも)はざる大兵猝(にわか)なりて本謀と違ふに至り、兵を引き退かんと欲す。我軍之を急攻す。氏忠敗れ黒駒に奔る。氏勝軍を還し来戦す。勝成の兵大田仁蔵先登し首級を獲る。高力正長敵兵を斬り、平原弥二郎清宗槍を

揮ひ力戦す。元忠・勝成・康貞の兵力を悉くし之を拒ぐ。氏勝敗走す。年譜・創業記・家忠日記 神祖新府に在り。煙塵起つを望見して曰はく「我兵勝てり」と。果たして然り。創業記 四将追撃し斬首三百余級、新府に上る。創業記・三河物語・徳川記曰、五百余級。今従年譜・家忠日記・松栄紀事 神祖之を新府郊外に梟す。氏直の兵戦敗を知らず来たり。梟する所の首を視れば則ち或は其子弟伯叔或は其新族、皆悲泣し闘志無し。氏直愈畏縮し敢へて出兵せず。年譜・創業記・家忠日記、松栄紀事曰、氏忠踰三阪至東郡。縦兵火カ焚民舎掠資財。元忠・清宗・勝成・康貞率二千余騎発故府急攻。氏忠・内藤信成先登。部曲獲首三十余級。敵兵離散四方剽掠。故不得拒戦而潰走。我軍追撃。敵兵或陥崖谷而死、或逃遁山林。氏忠軍騎入黒駒。元忠・勝成・康貞・清宗斬首二百余級、献之。三河物語略与之同。今従家忠日記

二十日、神祖新府を発し故府に至る。諸将の功を賞め鳥居元忠に郡内を賜ふ。年譜・創業記・家忠日記 氏直砦を豆生田に築き兵を置き之を成る。

二十九日、我兵豆生田に出て暴く。殆ど危し。久世三四郎廣宣平四郎長宣子 身を挺し

戦を搏(伝)ふ。神祖其危きを見親(みずか)ら兵を将ゐ之を救ふ。大須賀康高松栄紀事作大久保五郎左衛門。蓋大須賀之誤。今従徳川歴代・榊原康政・酒井忠次・大久保忠世・石川康通・本多廣孝・岡部正綱前鋒を為す。敵、大軍の至るを見将に退かんとす。久世廣宣進み闘ひ野中六右衛門と槍を接す。数創(あまたきず)せられ遂に柵内に入り其首を獲る。諸将力戦し砦を破る。大久保忠佐、廣宣を抱へ営中に謁見す。神祖其戦功を褒め親ら薬を賜ひ創を傅(ふ)す(手当てする)。父祖の武功を称め之を慰労す。松栄紀事不日。年譜・創業記並云、二十九日我兵破豆生田砦。今事従紀事同従二書○家忠日記曰、二十七日新府諸将相議、各遣諜者覘敵所在、大須賀康高之兵有長于斥候者、諸諜従之而行、審知敵在豆生田砦、帰告之。諸将発兵襲砦。康高・康政為先鋒奮撃破砦。多獲首級。与松栄紀事異。附以備攷北條氏直、武川の士を招くと雖へども、神祖に属するを以て従はず。氏直再び書を以て之を誘致す。中澤縫殿右衛門・中澤新兵衛其使を殺し其書を奪ひ之を献ず。神祖之を褒む。家忠日記依田信蕃、其族次右衛門をして眞田昌幸を説かしむ。神祖に降れと。昌幸之に従ひ印章を請ふ。神祖之を許す。松

栄紀事

九月朔、北條氏直の候騎来我営を窺ふ。酒井忠次之を撃ち却く。（年譜・創業記・家忠日記）高遠城主保科正直（前此不見正直為高遠城主。蓋乗甲信之乱而取之也）酒井忠次に就き降を乞ふ。伊奈郡主藤澤二郎猶親（松栄紀事作頼親。今従家忠日記）箕輪郷に拠りて叛す。正直之を攻め相戦ふこと三日。遂に其城を抜く。（創業記・家忠日記・松栄紀事）神祖、松平康親・小笠原安芸守信元及び其族丹波守安次・山田市蔵時忠をして豆駿二州の界三枚橋城を戍らしむ。

二十五日、小田原の兵三島に出て之を攻む。安次・時忠戦死し、余兵堅守す。神祖之を賞し食邑一千石を信元及び安次の子新九郎廣勝に加へ賜ふ。韮山の敵兵亦屢（しばしば）三枚橋城を窺ふ。康親善く之を守り、敵近づくを得ず。転じて沼津城を攻む。城主本多重次之を撃走し獲首三十余級なり。（年譜・創業記有日、無其事。今拠家忠日記・松栄紀事）

十月、神祖、依田信蕃・直(真)田昌幸をして碓氷嶺に屯せしめ以て小田原の糧道を絶つ。 年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

十六日、松平紀伊守家忠卒し、子家信嗣ぐ。 諸士伝略

二十四日、保科正直の功を賞め伊奈郡の半を賜ふ。 家忠日記・松栄紀事 高木廣正をして高木善二郎清秀を召し麾下に仕へしむ。 清秀六郎左衛門宣光子。後称主水正 清秀武幹（能力）有り。初め織田信秀に属し中に水野信元に属す。害に遭ひ、佐久間信盛に属し是に至る。神祖に謁し食邑一千石を賜ふ。 家忠日記・諸士伝略 武川の士山高宮内・柳澤兵部等敵と花水阪に戦ひ首級を得、之を新府に献ず。神祖之を褒め各旧邑を賜ふ。 家忠日記 北條氏直久しく若御子に在り。神祖と相持し戦毎に利あらず。直(真)田昌幸碓氷嶺を塞ぎ糧道通ぜず。軍日に匱乏(ひっぽう)す（乏しくなる）。

二十九日、叔父美濃守氏規をして和親を請はしめて曰はく「甲信二国、家□卿之を全領せよ。上野自ら之を領す。上野沼田を以て甲州都留郡及び信州佐久郡に易

へん」と。神祖之を許す。氏直我兵の後を躡(お)ふを恐れ、質を交ふるを乞ふ。其臣大道寺孫九郎直政・山角某を以て質と為す。神祖、酒井小五郎家次を以て質と為す。家次、忠次長子。歴宮内大輔任左衛門尉

晦、氏直婚を請ふ。神祖約し弟(第)二女を以て之に嫁がしむ。故に質を交ふるに及ばず、互に之を還す。氏直兵を引き小田原に還る。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・松栄紀事

諸将兵を率ゐ筑摩河上巖村田城を攻む。城兵堅守し下らず。諸将、将に引かんとして云はく「城兵出て躡(お)はん」と。依田信蕃殿(しんがり)を為し奮撃し之を大破す。斬首三百余級。残兵敗走す。神祖書を信蕃・其弟新九郎・源八郎及び従兵依田豊後・依田右近・依田主膳・奥平金弥等に賜ひ之を褒む。創業記・家忠日記・松栄紀事

十一月、神祖信州を平定せんと欲し諸将に命じ上口山砦を修せしむ。五日、松平家忠善光寺に向ふ。

七日、勝山砦を築く。砦(柴)田康忠・菅沼大膳をして依田信蕃に会はしむ。大膳未知為誰。

蓋小大膳定利。否則其父也　伴野刑部少輔拠る所の前山城を攻む。河窪與左衛門信俊　按ずるに、武田家譜、信俊初め新十郎と称す。武田兵庫頭信實の子なり。甲州平ぎ神祖、簗瀬某・筧信實・子信俊時に十九歳をして来謁せしむ。以て甲州河窪を領せしめ、河窪氏と更（か）ふ。・三枝平右衛門等勇を奮ひ争進し城遂に陥つ。　家忠日記曰、刑部少輔、小笠原之族而世長于弓馬之業。至是廃絶　信蕃・康忠、高棚・小田井二城を攻め之を抜く。信濃人平原善正　松栄紀事正作心・平尾平蔵・大井民部少輔・小山田六左衛門・森山豊後・志賀與三左衛門・栢木六郎・望月印月齊等皆降る。

十二月十一日、神祖甲府に在り。甲信二州を以て粗（ほぼ）定め、休暇を諸将に給ふ。各采邑に帰る。　松栄紀事係十一月而不日。今従家忠日記　柴田勝家使を遣はし修好し以て甲斐を平定するを賀す。　年譜・家忠日記・松栄紀事

十二日、神祖甲信二州の士を召し戦功を論ず。其大小に随ひ旧邑を全給し或は之を減損す。平原宮内当に全邑を賜ふべし。人有りて、碓氷川の戦に宮内、大村三

右衛門に党すと訴ふ。田野の邑民之を証す。故に神祖之を両(ふたり)ながら召し新たに之を鞫問(きくもん)(ただす)す。皆佩刀を撤するに宮内服せず。将に事を出さんとし未だ決せず。神祖之を留む。宮内素(もと)反謀を懐(おも)ふ。殺さるゝを疑ひ、奥山新八郎の童奴の所持する刀を奪ひ立(たちどころ)に童奴を殺し刀を揮ひて入る。事起くること倉猝(そうそつ)(にわか)なり。左右(側近)敢へて吾(ママ)を支ふるもの莫し。甲州の帰降の土辻弥兵衛空手に之を捕へんと欲す。宮内其額を斫(き)る。血流れ面に被り両目昏眊して退く。宮内勢に乗り直進し神祖に近づかんと欲す。土屋権右衛門雨戸を闔(と)ぢ、戸外又設閾、排戸以蔽風雨、俗謂之雨戸小幡又兵衛昌忠山城守虎盛孫豊後守昌盛子時に十六歳、短刀を抜き宮内と闘ひ左手を傷せらる。永見新右衛門槍を取り以て之を擬(ねら)ふ。宮内急ぎ進み之を撃たんと欲す。新右衛門槍を正す遑(いとま)あらず鐓(いしづき)を以て宮内を突き倒す。昌忠進撃し之を殺す。神祖其功を賞め弥兵衛を責めて曰はく「汝の志壮張なりと雖へども空拳以て白刃を犯すは甚だ謂無きなり」と。遂に之を逐ふ。松(家)忠日記・松栄紀事

是月、神祖甲信二州の帰降の士と遠州秋葉寺上に会す。赤心無弐の誓書、成瀬正一・日下部定好之を監る。総て七百五十七人なり。家忠日記・松栄紀事、人別列姓名。今従簡約挙其大数 山縣昌景・土屋昌恒・原胤長・一條義龍の部曲及び関東僑人一百十七人を分け井伊直政并びに四隊の兵に属さしむ。食邑四万石以て一隊と為す。兵器皆赤色を用ゐる。世に之を赤備と謂ふ。直政年少と雖へども将帥の器有り。故に之を寵任す。家忠日記・松栄紀事○拠甲陽軍鑑、武田信玄之将小幡上総介信直・飯富兵部二部皆用赤色。甲州人謂之赤備。直政部下多甲州人故模之也

二十一日、神祖浜松に凱旋す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事 成瀬正一・日下部定好を以て奉行と為し、平巖親吉郡代と為し甲州の政令を掌らしむ。帰降の士櫻井某・市川伊清齋・工藤源隨齋・巖間大蔵左衛門をして風聞を採訪し、以て浜松に達せしむ。家忠日記・松栄紀事 鳥居元忠甲府に留まり守る。創業記 甲信二州に残党の未だ服せざる者有り。大久保忠世・柴田康忠・菅沼大膳をして甲府に留在せしむ。小

濱民部左衛門景隆・間宮造酒丞をして副と為し以て之を討平せしむ。　家忠日記・松栄紀事

武川の士風間某二百余人を聚め乱を作す。御手洗五郎兵衛直重之を撃破し風間某を斬り其首を献ず。神祖之を賞し食邑を賜ふ。　松栄紀事

是歳松平福松麻呂忠吉東條城より駿州沼津城に移封し四万石を食む。　源流綜貫

烈祖成績巻之四　終